

明治三十五年十月十日發行(每月一回發行)
明治三十五年十月十五日(第三種郵便物認可)

東京

淨

瑠璃

雜

誌



第三卷
第二號

目次

○藤井小勝翁○竹本素行及門下一團○竹本京子○竹本京之助○豊澤團榮

○義太夫會員諸君に告げ併せて義太夫俱樂部設立の質義に答ふ

○浮瑠璃文學

○評釋

○卅三間堂棟由來(二)

○藻

○詩、佐藤六石、○歌、月の舎○歌仙、喜又、一力、○俳句、文の舎

○狂句、春の舎、ちひら○情歌、道太郎

○寄書

○一大革新を施せ

○聽客の改良

○有望の團洲

○皆様方へ

○雜錄

○義太夫節役員の改選○大阪各地の通信○寄席めぐり評判○文樂座の藝題と太夫○男女義太夫評判競(一)

○評判

○更張一座○小政一座○京子一座○素行一座○綾之助一座○朝太夫の堀川○文字之助の管四○團合連○松本亭大集會○鬼若さらへ○五睦連其他數十件

○事歷

○藤井小勝翁

○里雀

○端書投書數百種

桑野桃花
傳通生
娛老生
初代竹本綾之助

本社編輯員と寄書家

編輯部	藤村 梅
西沼 虹	田心 童
寺田 霞	西村 月
關梅	新若
壯語	石樓
島山	葛城
桑野	葛城
花華	瓶

明治三十五年十一月九日印刷
明治三十五年十一月十日發行

編輯兼 佐藤徹雄
發行所 東京市下谷區二長町三番地
印刷所 東京市神田區駿河臺鈴木町十六番地
印刷所 東京市神田區佐久間町三丁目廿一番地

發行所 東京市神田區駿河臺鈴木町十六番地
發賣元 東京淨瑠璃雜誌社
萬卷堂出版所

社告

霜白く葉黄ばみ天地肅殺の候我社こゝに大改革を行はんと欲し先づ神田駿河臺鈴木町十六番地に假移轉し土木工事を起せり落成の期は明春三月鳥歌ひ花笑ふの時にあり。正に本紙面と共に本社面目の一新を見む茲に特に會員諸君并に大方賛同各位に告ぐ

本 社 東 京 淨 瑠 璃 雜 誌 社
發 兌 元 林 書 萬 卷 堂 出 版 部

東京市神田區駿河臺鈴木町十六番地

電話番號本局(一九六八)

淨瑠璃書類廣告

帝國文庫 忠臣藏淨瑠璃集 幸堂得知 君校訂

帝國文庫 近松時代淨瑠璃 饗庭篁村 翁校訂

帝國文庫 淨瑠璃名作集 博文館編 輯局校訂

帝國文庫 近松世話淨瑠璃 博文館編 輯局校訂

帝國文庫 近松半一淨瑠璃集 水谷不倒 君校訂

帝國文庫 紀海音淨瑠璃集 水谷不倒 君校訂

帝國文庫 續近松淨瑠璃集 水谷不倒 君校訂

帝國文庫 續近松淨瑠璃集 水谷不倒 君校訂

帝國文庫 續近松淨瑠璃集 水谷不倒 君校訂

帝國文庫 續近松淨瑠璃集 水谷不倒 君校訂

帝國文庫 續近松淨瑠璃集 水谷不倒 君校訂

帝國文庫 續近松淨瑠璃集 水谷不倒 君校訂

帝國文庫 續近松淨瑠璃集 水谷不倒 君校訂

帝國文庫 續近松淨瑠璃集 水谷不倒 君校訂

帝國文庫 續近松淨瑠璃集 水谷不倒 君校訂

帝國文庫 續近松淨瑠璃集 水谷不倒 君校訂

帝國文庫 續近松淨瑠璃集 水谷不倒 君校訂

帝國文庫 續近松淨瑠璃集 水谷不倒 君校訂

帝國文庫 續近松淨瑠璃集 水谷不倒 君校訂

帝國文庫 續近松淨瑠璃集 水谷不倒 君校訂

帝國文庫 續近松淨瑠璃集 水谷不倒 君校訂

帝國文庫 續近松淨瑠璃集 水谷不倒 君校訂

帝國文庫 續近松淨瑠璃集 水谷不倒 君校訂

帝國文庫 續近松淨瑠璃集 水谷不倒 君校訂

帝國文庫 續近松淨瑠璃集 水谷不倒 君校訂

帝國文庫 續近松淨瑠璃集 水谷不倒 君校訂

帝國文庫 續近松淨瑠璃集 水谷不倒 君校訂

帝國文庫 續近松淨瑠璃集 水谷不倒 君校訂

帝國文庫 續近松淨瑠璃集 水谷不倒 君校訂

帝國文庫 續近松淨瑠璃集 水谷不倒 君校訂

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

MENT
ODOR
T O N I C

音聲家の必携可驚き、めある聲
の出るくすり

トニク

東京神田區美土代町二丁目

發賣本舖 尾形龜三郎

大學風藥

發賣本舖 尾形龜三郎

東京神田區美土代町二丁目

アンチピリン散引風一ぶく
藥本劑は尾形大學に於て一
新藥發見せり世に大學風藥
と稱するは是なり

○諸番附出版所

○御名入團扇製造所

○御名入繪入略曆出版所

○錦繪出版所

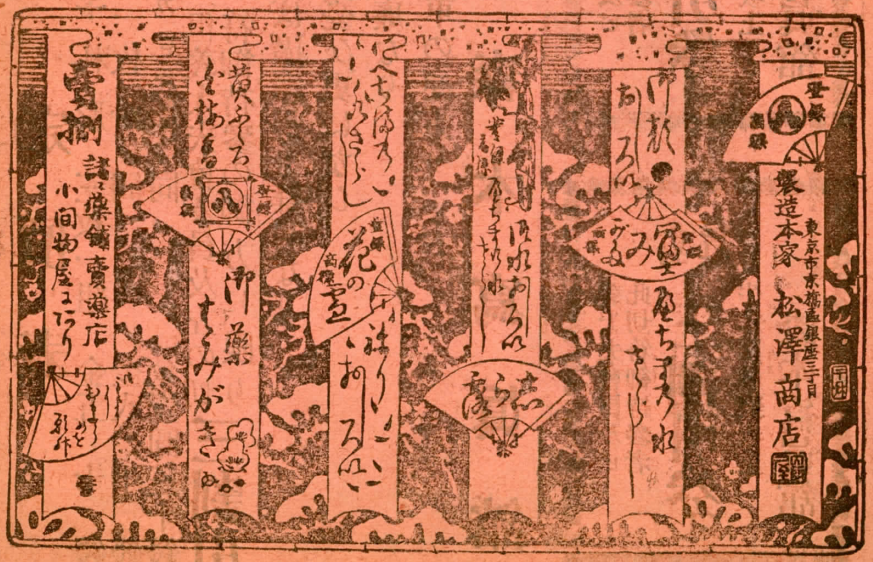
右の品々精々勉強入念美く敷調製仕候
間多少にか、はらず御用向之程偏に奉
願上候

略曆團扇製造問屋

東京淺草橋際

茅町一丁目十三番地

片田長次郎



歐米新式寫真廣告

◎弊館の寫真器械は歐米新式の器械なれば撮影最も鮮明なり
 ◎弊館の寫真は何年間保存しても變色の憂ひ更になし
 ◎弊館は無比の勉強なれば價も又極めて廉なり
 ◎弊館は牛込神樂坂なれば飯田町より瀛車の便あり

東京市牛込區神樂坂上

森本寫真館

定價表

手札形	三枚一組	金五十錢
二枚掛	同	金八十錢
カビ子形	同	金壹圓三十錢

但義太夫會々員及左の切符御持參の御方に限り三割引

寫真 三割引券

義太夫會員及此切符御持參者
 牛込區神樂坂上
 森本寫真館

寫真 三割引券

義太夫會員及此切符御持參者
 牛込區神樂坂上
 森本寫真館

寫真 三割引券

義太夫會員及此切符御持參者
 牛込區神樂坂上
 森本寫真館



藤井小勝翁

歐米新式寫真廣告

定價表

手札形 三枚一組 金五十錢
 二枚掛同 金八十錢
 カビデ形同 金壹圓三十錢
 但義太夫會々員及左の切符御持參の御方に限り

三割引

◎弊館の寫真器械は歐米新式の器械なれば撮影最も鮮明なり

◎弊館の寫真は何年間保存しても變色の憂ひ更になじ

◎弊館は無比の勉強なれば價も又極めて廉なり

◎弊館は牛込神樂坂なれば飯田町より流車の便あり

東京市牛込區神樂坂上

森本寫真館

寫真 三割引券

義太夫會員及此切符御持參者

牛込區神樂坂上

森本寫真館

寫真 三割引券

義太夫會員及此切符御持參者

牛込區神樂坂上

森本寫真館

寫真 三割引券

義太夫會員及此切符御持參者

牛込區神樂坂上

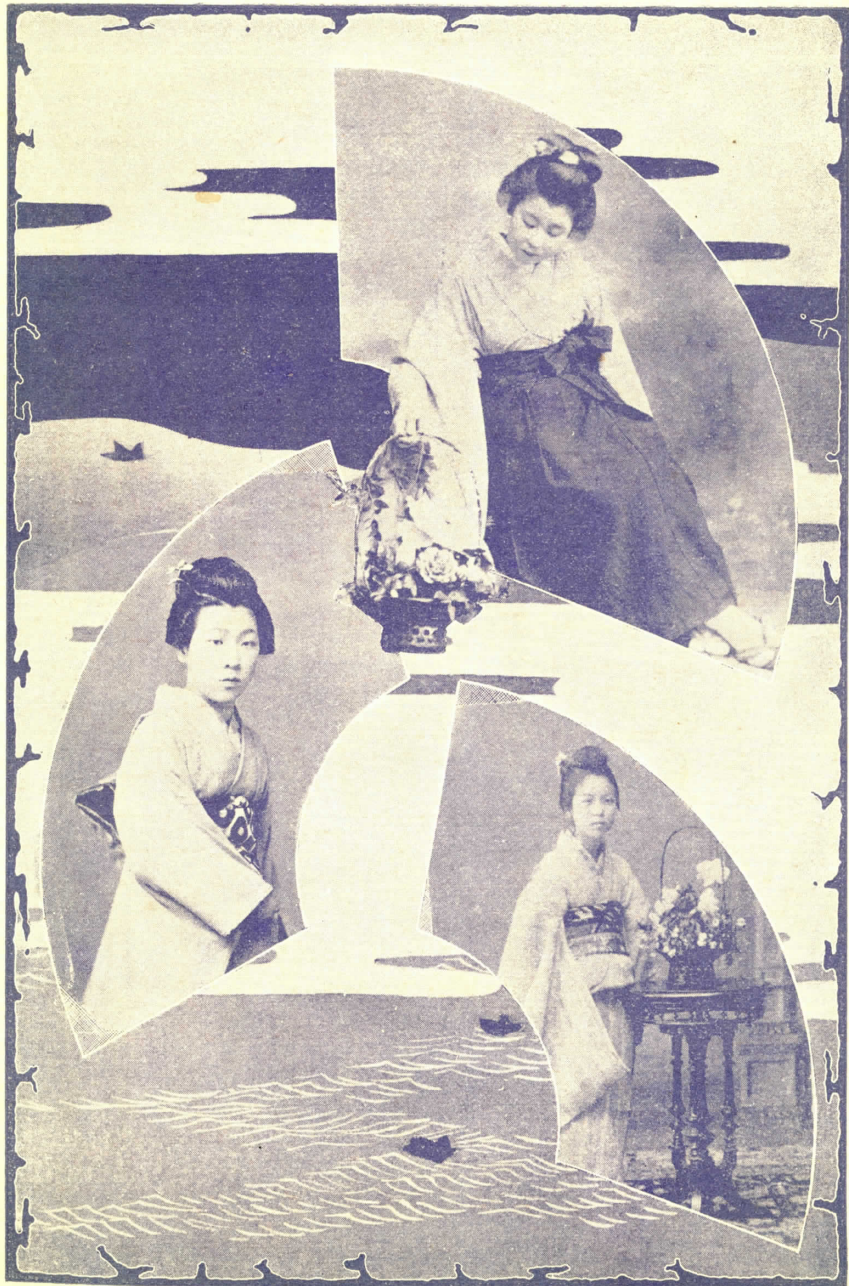
森本寫真館



藤井小勝翁



圖一 下門及師行素本竹



猶興舎印行

助之京本竹 榮團澤豐 子京本竹

東京 淨瑠璃雜誌 第二卷 第二號



○義太夫會諸君に告げ、併せて義太夫俱樂部
設立の質義に答ふ

小積んで大と爲るは、自然の理なり。我等曩に義太夫會を設け、斯道に志あるものは素人と黒人とを問はず、男と女とを論せず、募りて會員と爲し、五人入れ十人入れ既に今日は數百人の多きに及びぬ。さて其の合同を謀らん爲めに、淨瑠璃雜誌を發行したるに、意外の好評を得て、賛成の聲四方に起ると共に、取越苦勞をする者あり。曰く雜誌の發行至極妙なれども、繼續如何あらんと、此は是れまで雜誌度々發行して、度々廢刊せし者ありしよりの取越苦勞なり。我社は、既に數百名の會員あり。ろが中には、維持費として、數百金を投せんと申込む者あり。況んや社主は相當の資産ありて、ある銀行の常務取締役なり。義太夫を好みて、諸所を語りまはれり。素人とは云

ひながら、斯道には黑人なり。義太夫界の経験を積みて、さて此の雑誌に従事したれば、彼の吹けば飛ぶ輩が、發行せる三號雑誌と同日にして論ずべからず。社主の息のあらん限、つくべきは此の雑誌なれば、既に會員たる者は勿論、會員たらんとする者も、餘計な取越苦勞をするに及ばず。況んや小積んで大となれる義太夫會にて、自然の理に叶へるものをや。

一人にて樂むよりは二人、十人にて樂むよりは百人、凡そ大勢にて樂む程大なる樂みは莫るべし。我が義太夫會は、大勢にて樂まんとて起れるなり。大いなる樂みを得んて開けるなり。毎月一回の茶話會、春秋二季の大會は豫ての希望なり。之を實行せんとするに、恰も好し、職員既に數百名に及びぬ。因つて去る八月の下十五日間、京橋菊元亭に於いて、試験的一會を催したるに、成績悪くは無かりしも、亦思はしくもあらざりき。此は會員の氣脈と消息とを十分に通せざりしに由る。然るに今日は、此の氣脈と消息とを通すべき機關雑誌あり。こゝに第二會を催しなば、前回に勝る成績を見んは必定ながら、隨を得て蜀を望むの念やみがたく、爰に此の義太夫會を擴張して、更に義太夫俱樂部を設立せんと欲し、雑誌第一號に於いて「義太夫俱樂部設立の議」といふを載せたり。我が希望の條々一記したれば、會員諸君一讀あらんことを望む。

ある一會員いへらく。義太夫俱樂部設立の主旨明瞭にて、殊に第一より、第十まで逐一擧げられたる條々、至極よろしけれども、其の維持費として、部員一名に付き、一時金五十錢宛を納めしめ、二千名に及ぶを待て開業すべしとあるは、あまり氣の長き談なるうへに、一千圓ばかりの金にては、何にも足らざるべしと。此は尤もなる質義なり。我等實は一株五十圓にて、二千株を募り、拾萬圓の資本にて、歌舞伎座位の大さの俱樂部を設立せん素願なれども、始めより然る大業なる事を申し出さば、行はるべき事も行はれがたきを慮りて、わざと五十錢宛といふ規定を設けたるなり。此は例の小積んで大となるの理を應用したるなり。會員諸君、願はくは我等が本意を察し、小積んで大となるの素願を遂げしめられんことと。

論 說



○淨瑠璃文學

万 亭 一 力

人心を感動せしむる、音樂に若くは莫し、夫の笛太鼓を聞かずや、其の音悠揚として、其の響壯快なり。簫箏を聞かずや、其の聲清亮として、其の韻整肅なり。喇叭の勇しき、琵琶の激越なる、ビヤノの柔しき、オルガンの遒麗なる、或は尺八の面しろき、或は篠笛の心ちよき、皆人心を感動せざるはなし。然れども、此は唯、口に吹き、手に弾くのみ。音を聞き、聲を聴くのみ。未だ其の音に

深き意をこめ、其の聲に長さ味を含めたりといふを聞かず。しかも猶よく人心を感動せしむるにあらすや。況んや其の音に其の聲に、深き意を籠め、長さ味を含めたるものに於いてをや。夫れ深意を音響に籠め、長味に聲韻に含めたるもの、淨瑠璃に若くは莫し。されば、其の音や、笛太鼓に勝り、其の響や、簫箏に勝り、其の聲や韻や、遙かに夫の喇叭、琵琶、ピアノ、オルガンに勝れり。かるが故に、聞くもの其の意に感じ、其の味に動せずといふことなし。蓋し其の淨瑠璃作者の手腕、世に勝れたるにも由らずんばならず。否ろの本は、全く作者の手腕にあり。かの曲譜と音節とは、ろもく未のみ。されば、世に勝れたる作者出で、世に勝れたる音曲現はるは、自然の理にて、元ト音曲としてものせざるものすら、其の作、世に勝れたるものは、亦曲譜を施し音節を附けで、もてはやさるゝにあらすや。夫の行長が平家物語、阿通が淨瑠璃十二段冊子の如きはなり。さて行長は、足利文學の基を開き、阿通は、徳川文學の端を發しぬ、此の二人は、所謂深意を音響に籠め、長味を聲韻に含めたる、我が淨瑠璃の祖宗といふべし。

凡ソ文學の起原は、歌謠にあり。歌謠は、口に唱へ耳に聞くものにて、人心を感動せしむる無絃無孔の音樂なり。須佐之男命の妻籠の歌、八千矛之神の妻問の歌、我は之を神代の淨瑠璃と謂はんとす。世の學者、口を開けば輒ち曰はく、文學々々と、しかも其の文學の文字に在ることを知りて、歌謠に在ることを知らず。目に視ることを知りて、耳に聽くことを知らず。何ぞ能く深意の音響に籠り、長

味の聲韻に含を知らむ。「みづくし久米のこらが」は、神武天皇の御製なり。「狹井河よ雲たちわたり」は、伊須氣余理姫の御歌なり。日本武尊の「やつめさす」の御歌に於ける、弟橘姫の「さねびし」の御歌に於ける、いづれも口に唱へ、耳に聞きたるものにて、書に寫して、目に視たるものにあらず。文字を以て傳はらずして、音響と聲韻とに由りて傳はれるにあらずや。況んや夫の酒樂の歌の如きは、後世の謠ものとなりて、歌ひ傳へたるをや。降りて奈良朝に至り、大寶律令を始めとして、古事記、日本紀などいふ書出來れるが中に、音響と聲韻とに由りて傳はれる歌謠を集めて大成せるものは、實に萬葉集二十卷なりとす。此頃は、漢學盛んに行はれ、隨つて漢字を用ひて文章を綴り成す事も巧になりぬれば、かの律令、記紀なども、皆漢字を用ひたり。萬葉の如きは、其の漢字の遣ひざま、實に奇々怪々にて、後世稱して萬葉假字といふに至れり。かく不完全ながらも、文字を用ひて、歌謠を書き留むるやうになりければ、耳に聞く方、おのづから疎かになりて、目に視る方、や、精しくならんとするは、免かれがたき理なり。されども音響と聲韻とに由りて傳はれる精神は、毫も古へに異ならず。かくて平安朝となりては、漢學ますます盛んになりて、人々詩文を遊ぶ風俗となりぬ。されば當時世に出でし書は悉く漢文躰なり。まづ勅撰には、續日本紀、日本後紀、續日本後紀、文德實錄、弘仁格式、新撰姓氏錄、令義解の類、私撰には、古語拾遺、類聚國史の類、又詩文の盛んなりしことは、經國集、本朝文粹など見ても知るべし。かく漢學盛んなりしからに、國文漸く亂れて、かの宣命なども

漢ごまになりゆきぬ。さて漢吳音すら紛らはしくなりければ、朝廷に音博士といふものを置いて、之を正させたまへりき。さる中にも、猶絶えざること縷の如きものは歌謠にて、樵こる杣、漁する蟹の口ずさめるは、かの神樂催馬樂なるべし。此は謠合、歌垣などいひて、今の舞踏めきたるものに用ひけるが、古くよりある男女の遊びの中、最も面白きものなりければ、此を神にも見せ奉らんとて、神樂は始りけるとかや。さて此には、律調二段、呂調三段などいひて、律呂を分ちて、専ら歌を主としたりば、所謂口にて唱へ耳に聞くべきものにて、文字を以て傳ふべきものならず。是はた我が淨瑠璃と謂ふも可ならんかの。歌謠の道、わづかに神樂催馬樂に残れる衰運を、延喜天曆の兩朝に挽回せしは、醍醐天皇が、友則、躬恒、貫之、忠岑等に勅して、古今和歌集を撰ばしめたまへりしに始まる。次いで後撰集、拾遺集出づ、之を三代集といふ。さて八代集となり、十三代集となり、遂に大成して廿一代集となりぬ。さてころ書に寫して、目に視るが主となりて、口に唱へて、耳に聞くが客となれるは、勢已むを得ざりしか。されども、此等の集が基となりて、我が文學大いに開け、土佐、蜻蛉などいふ日記を始めとして、竹取、宇津保、落窪、伊勢などいふ物語あらはれ、世に稀なる源氏物語などさへ出でたり。鎌倉時代に至りては、兵亂打つゝきて、文學いたく衰へ、僅かに世に現れたるは、保元平治物語、源平盛衰記、今古著聞集、十六夜日記等のみ。中に就いて、殊に人氣に投せしは、かの平家物語にて、琵琶を弾じて、之を謠ふに至れり。是れ我が淨瑠璃中、特に義太夫節の祖といふ所以なり。

足利時代に至りては、取りたて、云ふべき程の著述は、親房が神皇正統記、兼好が徒然草などのみ。さて平家の反響、謠曲にあらはれて、口に唱へ、耳に聞くべきもの、専ら此の謠曲に由りて傳へらる。阿通が十二段冊子、豈に亦此の反響に由りて、平家の昔にかへりしにはあらざるか。蓋し琵琶に合せ、蛇皮に合せて謠ふ趣、彼此同じければなり。されば之を我が淨瑠璃中、特に義太夫節の宗と謂ふも可ならんが。徳川時代となりて、家康、學校を山城の伏見に建て、下野足利學校の僧三要を、其の教師となし、木製の活字十餘萬を付與せしかば、三要これを以て、書籍を印刷しけり。世に足利本と稱する是なり。又假字交りの活字も、此頃よりありて、伊勢、源氏、宇治拾遺の類を印刷せり。之を慶長活字本と稱す。かく和漢の書を刊行しければ、和漢學ともに盛んになりゆきつゝ、五代將軍の頃に至りて、尤も其の盛況を見る。此時に當りて、和學者には、沙門契沖、荷田春滿等あり、漢學者には、林春齋、伊藤仁齋等あり。連歌俳諧には、北村季吟、望月長好等あり。さて口に唱へ、耳に聞き、深意を音響に籠め、長味を聲韻に含めて、大いに人心を感動せしめたるは、學、和漢を兼ね、文、雅俗を交へたる近松門左衛門に若くは莫し。門左衛門は、長州萩の藩士、杉森某の男なり。名を信盛といふ。幼にして肥前唐津の近松寺に入り、髪を削して古潤と號す。博覽多通にして、才識衆に超れたれば、師之に一ヶ寺を與へて住持たらしむ。古潤謂へらく、一寺の主何かせむ。衆生を濟度せむに、豈に唯圓頂方袍に止まらんやと、即ち京なる弟の岡本一抱をたよりて、髪を蓄はへ、出で

鎌倉時代の浄瑠璃は、平家物語にありて、足利文學の基を開き、足利時代の浄瑠璃は、謡曲にありて、徳川文學の端を發したり。さて徳川文學の一部、吾大半は、浄瑠璃にありといふも、強ち誣言ならざるべし。看よ近松以後、近松の流を汲むもの彬々輩出せるを。かの竹田出雲、錦文流、松田和吉、吉田冠子、近松半二、並木千柳、竹田因幡、紀海音、西澤一鳳、爲永太郎兵衛、並木宗輔、同五瓶、豊竹應律、中村阿契、若竹笛躬、近松東南等は、皆當時の作者なりき。されば其の作、亦牛に汗し、棟に充つる程ありて、實に牧擧に違あらず、浄瑠璃の盛んなりしさま見るに足らむ。顧ふに世に戯作者と稱する、京傳、馬琴、三馬、一九等の著作、豈に亦此の浄瑠璃より胚胎して、一派を成し、にはあらざるか。

我世の韻文と稱するものを觀るに、古への今様よりなり。否、落首、地口などいふものに過ぎず。然るを事々しげに韻文といふ。此輩は、例の文學を口にするものにて、しかも文學の文字にあることを知りて、歌謠にあることを知らず、目に視ることを知りて、耳に聞くことを知らず。何を能く深意の音響に籠り、長味の聲韻に含むを知らむ。又何ぞ能く浄瑠璃の一大文學にして、しかも一大韻文なることを知らむ。浄瑠璃は、實に一大韻文なり。詞を五七にあやなすは、唱ふる者やすらかに、聞く者すなやかならん爲なり。されば、其の曲は、五常に亘り、七情に通じ、其の調は、五聲に叶ひ、七聲に應じ、人心を感動して、其の音や悠揚、其の響や壯快、其の聲や清亮激越、其の韻や、整肅遒麗、面しろくして、心ちよきこと、夫の笛太鼓、簫筆篳、喇叭、琵琶、ビヤノ、オルガン、尺八、篠笛の類と同日にして論すべけんや。古今歌謠の類、我之を一括して浄瑠璃文學といふ。世の文學者かの地口めきたる韻文を取りて、一大韻文たる我が浄瑠璃を捨つるは何ぞや。



評 釋

○世三問堂棟由来(二)

麴亭主人

夢や結ぶらん、妻は傍を立退て、奥を覗いつ立戻り、おづ／＼傍へ立寄てゆり起せども、夫は寢付の高軒、風が持て來る斧の音、伐木どう／＼てう／＼と、木を伐る音やこたへけむ。お柳は身内の苦み

を、とつとこらへて立寄と、得も岩代の結び松、我は柳の緑子が、顔を詠めつとつ置つ、
 「夢や結ぶらん、此は三段目の中のオクリなり。總べてオクリといふものは、上文の末の一句を下文の冒頭に送りて、上下相關聯せるさまを示すなり。此は上文に、「妻が思ひは露知らぬ、夫は脇を
 手枕のうたゝに夢や結ぶらん」とある、其の「夢や結ぶらん」を取れるなり。さて此の冒頭の文極めて拙なし。さるは、僅か八行の文中に、「立退て」「立戻り」「立寄て」「立寄と」と類語を重ねたるが

上に、伐木とうく、木を伐る音や」云々と續けたる、いとうるさし。とうくは、丁々にて、假字にては「たうく」と書く。此は詩經に「伐木丁丁」註に丁丁は、伐木聲也と見ゆ。されば、「伐木丁々」といへば「木を伐る音」といふこと贅なり。「木を伐る音」といへば、「伐木丁々」といふこと贅なり。況て上に、「斧の音」とあれば、此は孰れも省きて、「風がもて来る斧の音、てうく」として「たへけん」など云ふ方まさらむ。「得も岩代の結び松、我は柳の緑子」とつゝけたる一句、一段の精神にて、縷々數千言、此の一句より胚胎す。「岩代」は、紀州の地名にて、そこにある夫婦松の枝さしかはせるを、結び松といふなり。此れ第一節なり。

漸々に氣をしづめ、ヲ、ろれよ、互ひに顔を見て居ては、身の上語るも面はゆし、寢入たまふを幸に、今自からが云殘す、必ず夢と思さずと、白地に聞いてたべ、ノウ我こそ誠は柳の精、雨露の恵に生育ち、かやうに夫婦となる事も、一方ならぬ因縁ぞや、前の生にて誓ひたる、契を結ばん其の爲に假に女の姿と變じ、柳が下にて待受て、夫婦となりしも五年の、春や昔の春の頃、季仲が鷹狩に、鷹の足緒のかゝりし時、數多の武士に切崩され、既に枯れなん此柳、其時お前が一矢の手柄、鷹を助けて葉柳の、枝に障もアレ、又もや爰に散り来る葉は、我を迎へに來るかど、思へば遣る方せん方も、なく見やる足下へ、ちりくる柳の葉隠れや。

「我こそ誠は柳の精、雨露の恵に生育ち」云々は、上の「我は柳の緑子」云々を承けて、我が身の來歴を述ぶ。「鷹の足緒のかゝりし時」五行本に、足緒の「の」の字、「に」に作れり。されば「に」と語る。太夫も往々あれど、此は必ず「の」といふべきなり。「の」とは自他の差別あれば、能く心得おくべきなり。「ちりくる葉」ちりくる柳の葉」と重ねたる、前の「立退て」「立戻り」と同じく、いとうるさし。此れ第二節なり。

亂るゝ心おし鎮め、其時の情の恩、送る月日も重なりて、柳の花のコレ此緑丸、最早今年で五歳の春秋の重なれば、乳がなくと育つべし、成人の後々は、父の弓矢を承けたへ、潔い名を揚げてたも、ヤヤ、母は今を限にて、元の柳にかへるぞや、必ず草木成佛と、回向を頼む夫よ子よ、はなれがたなや悲しやと、いふ聲さへも忍び泣、立て見居て見聲あげて、わつとばかりに泣き叫ぶ。

「柳の花のコレ此緑丸」元の柳にかへるぞや」二句ともに又かの「我は柳の緑子」に應ず。以上お柳の口を借りて、ろの來歴を述べ、さて全篇の綱を提げたり。此れ第三節なり。之を第一段と爲す。音に目覺す平太郎、扱は夢とも幻とも、聞きしは誠でありけるか、何とてつれなくやるべきぞと、抱き留むれば一間より、老母も俱に轉び出で、様子は聞いたコレお柳、嫁女のうと呼ぶ聲も、ちりくる柳の葉隠れに、形は消えて失にけり。そこよこよと母と子が尋ぬる音に緑丸、かゝ様をこへ行かしゃつた、かゝ様のうくかゝ様と、父が後にかけて廻り、尋ね迷ふ稚子を、見るにたへかね爺親も縁が母やい嫁の女、かゝ様と聲をはかりに三人が、尋ねまはれば遠にも、引かるゝ心執着の、又

も姿を現はす有様。

平太郎、老母、緑丸の三人一家、お柳を慕へる狀を叙し、前段お柳が歎きに應ず、此れ第二段第一節なり。

ヤアか、様かとかかけよる稚子、夫も涙の聲を上げ、非常の草木といひながら、情あればこそ是迄に、睡まじくも馴なじみ、一人の若を設けし身が、何とて振り捨て歸りしぞ。せめては母を見送る迄、俱に介抱してくれよと、かこち歎けば漸くに、しほる、顔をふりあげて、傳へ聞く安部の童子が母上も、丁度我が身と同じ事、一人の子を残し置き、信田の古栖に歸りしとや。それは野干の年ふる身、我は元より草木の、歸る古栖の柳は今切崩されて枯柳、歸るといふは消ゆる身に、何とて形を残すべき、哀と思したまはれよ。

此は平太郎とお柳との問答なり。安部の童子は、安部の安名の子をいひ、信田の古栖は、攝州信田の森にある古栖にて、并に葛の葉の古事なり。事實の有無は、姑く置き、事「葦屋道滿大内鑑」に精しければ、こゝには「歸りしとや」「此の「とや」は、とてにやにて、義たがへり。此は「とぞ」といふべき處なり。「野干」は狐をいふ。此れ第二段第二節なり。

白河の法皇の御惱頻とて、都の使來りつゝ、我身を切捨て申すなり。最早朽木も時を得て、一字の棟となる事も、一ツは妙なる法の縁、佛果に連れし縁あれば、情の恩を報せん爲め、一ツの筐まゐらす

と、平太郎が手に渡し、夫ころは白河の法皇の前生の御頭なり。それを手柄に御身の上、再び出世をなしたまへ、必ず縁が事、お頼み申しまゐらす、エ、離れがたなや可愛やなア。アレ、風の音に連れ、柳の糸を切はらふ。斧鉄がてう、綯は爰に玉きはる、時ころ來れいざさらば、の聲の下、姿は見えずなりにけり。

此の第一節、第一號に掲げたる發端と見合すべし「白河の法皇の御惱」又「前生の御頭」の故、佛果に連れし縁の故、釋然として氷解すべし「アレ」風の音に連れ、柳の糸を切拂ふ、斧鉄がてう「遙かに第一段の「風がもて來る斧の音」に應ず。「符」は、コダマと訓じて山彦をいふ。さてコダマは木靈にて、木のたましひを指す「玉きはる」は枕辭にて、時にかけていへるなり。此れ第二段第三節なり。



詞藻

○新評戲曲題詞十首、爲依田學海翁

佐藤六石

真心俠氣雨相憐。生別從頭是底緣。說到真情多痛淚。此擒處手軟干綿。關取千兩幟
學海曰、濃厚密麗、此是才子筆、
回文錦字托相思。盲女琵琶情最悲。彈淚何人繁似露。碧雲扇上薜花詞。生寫朝顏詰

學海曰、向四柱中間、翻一筋斗、喝采滿場、却從此軟綿手裏弄將來、絕奇絕奇、檀浦寒潮咽不平。扶吾兩眼訴吾情。匹如伍子當年恨。破楚門頭怒浪生。出世景清

學海曰、比喻的確、詩亦似王新城詠古諸作、欲將逆櫓倒狂瀾、轉覺人間行路難。福島一株松偃蓋。滿船初旭護孤寒。平假字盛衰記

學海曰、旭字松字摘來做個材料、又是首篇同一用法、新評一出世堪醒。知與淫哇有徑庭。思到無邪本同揆。不妨呼做小葩經。

學海曰、褒獎過當、唯排斥淫哇一事、不敢推讓也、

綾之助 綾之助 あやにかしこし弘めてし 月の舎 名にあやかりし其の綾之助

天神堤 やゝ寒う煎じあげたる薬鍋
質 店 晴れたくといふも高聲
松王屋敷 八重ひとへ九重の花里の花
菅 四 子ばかり撰てのける種芋

双 寄 書 烏うたひ花綻びて春日和
力 雜 錄 來るかりや芦の便りを一束
双 評 判 取づくに彩る筆や繪師の腕
力 事 歴 名月や其人影のあからさま
里 雀 かげひなた無しに囀れ里雀
芝 居 冬の山たゝ見た儘の姿かな

○浄瑠璃雜誌第二卷第一號

を讀て

淺草 文 の 舎

卷頭人影 味ひはまた格別よ併ちまき
全 雛棚や飾り立たる赤毛布
改題の辞 鶯やごちら向ても愛らしき
社 説 やがて咲く黄金花や菊作り
評 釋 海棠更て變り易し散やなぎ
詞 藻 園に咲く言葉の花や風薫る

○義太夫節讀込歌仙一折

布 四 人やある紅葉の奥のひは一手 喜双
近 八 岑吹く風の律もひやゝか 一力
戀飛脚 ことし酒封切る金を月かけに 双
先代萩 雀や犬にくゝらせぬ垣 力
新口村 雪が降りさうなど明る障子越 双
信仰記 棒しはりなる鮭かつき行 力
城木屋 出れは入る出家侍諸商人 双
三日ノ九 西は山崎淀の川船 力
朝良小家 おもふ事叶はぬが世の習ひ也 双
千本三 娘が漬けた鮓を茶にする 力
夕顔棚 風薫る軒を目あての菖蒲うり 双
合邦ヶ辻 何を踏んだか足のうらゝ 力
御所三 本陣のさはつく二十六夜待 双
小 揚 鳴を突くのか稻らむのかげ 力

○狂 句

東猿に義を結びたいと馬鹿書生 春の家
伊達太夫仙臺公と下女おもひ 同
たつた一度だと辨慶あたまかさ ちから
母さんの名はお弓とお弦祝ひ付 同
是非に及ばず杯と筆助筆おろし 同

○都々逸 道 太 郎

外にあるとはソリアいささない

毛谷村「コレイナお前の女房は

私じやぞへサア〜女房じやく〜

斯なりや飽までろひとげる

宵にや口説いてツノ三の切

三代記「何の未練に止めやせぬ〜」

とは言へ別れにや泣落し

人も好く答私しも宜いと

十種香「斯んな殿御と添ひ臥の

身は姫御前の果報ぞと」

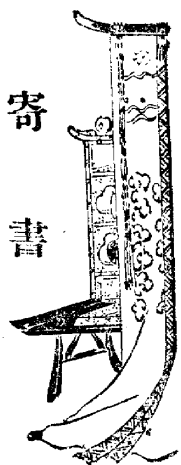
思うてまた見る主の顔

戀にやなまじい連さへ邪魔と

壺坂寺「明けの七つに鐘を聞き」

そつと抜け出で只一人

(八十)



寄 書

○一大革新を施せ

桑 野 桃 花

騙る者久しからずとは、古人の金言なり。今吾人が之を繰返しつゝ、啾々する所以のものは、果して何故なるか、曰く他なし、今日の義太夫界が、將に此運命に遭遇しつゝあるが故なり。

吾素より淺學短才にして、到底文筆を以て論議をなすの器にあらざるなり。されば從つて其文辞の無難にして、只徒らに識者の笑を買ふに過ぎざる可し。然り、然るをも尙忍んで、茲に貴重なる紙面の割愛を敢てするもの、蓋し尋常にあらざるな

(九十)

り。請少しく吾人をして言はしめよ。

現代の一般演藝界が、銷沈しつゝ、毫も揮はざるは是れ何故か、是れ榮枯盛衰と、自然の趨勢に外ならざるなり。然れども、就中、義太夫界が、近來頓に衰微の傾向を呈し、數年前、呂昇、長廣等が相接いで東上し、隆々たる喝采場裡に、目出度歸阪せし當時に比し、昨今續々として上京する義太夫語りが、一人として、彼等の右に出る者なきを以ても、如何に衰微せしかを推知するに難からざるなり。

彼等が黄金時代たりし、數年前の最盛は、決して自然に來りしには非ずして、其實、故綾翁、及び播磨等が其以前より作り來りし地盤の此時に至りて、漸く固まりしと同時に、一方に於て、綾の助住の助てふ二嬌が出現せしに依て、一時に偉大の

勢力を得て、他の一般演藝者を後に墮若たらしめたるなりき。

然るに、此時に當つて、無技無藝の徒が、唯容貌に依て、綾、住等と相並ばんと欲し、恰も雨後の筍の夫にも似て、現れ出しが不思議にも、何れも相應に人氣を博せしより、彼等は忽ち傲慢尊大となり、已れの能事了れりとなし、毫も技藝を顧る者なく、粉黛を施して、敢て醜業婦の態を學び聽客に媚を呈するを以て、自己が本分なりと思惟するに至りぬ。

此間に在つて、綾翁、播磨等の名人去り、所謂花形と稱する、朝太夫、京子、小豊後等のケレン黨が獨り全盛を恣にするに至りしより次第に眞正なる好曲家に嫌忌を招きしも、彼等は、ドースル連と稱するパチルスを目して好曲家と誤解し、是

等パチルスの蹂躪するに任せたるより、いよく好曲家に遠ざかられしより、彼等は遂に一種の陋劣なる手段を案出し、辛くも一時を糊塗せんとせしも、僅に一年余の命脈を保ちしに過ぎずして忽ち警察の干渉を受くるに至りしより、彼等も是に至つて施すべきの策なく、さりどて妙技を揮うて大勢を挽回せんとするの伎倆なく、遂に今日の結果を招きたる者にして、是れ當然の理なり。

然れ共、今日の義太夫界を此儘放棄せんか、我國古來より傳はり來れる淨曲の、近き將來に於て滅亡に歸し、遂に其形體をすら止めざるに至るやも知る可からず。

是れ即ち、吾人が憂慮する所にして、而して又、蹶起せし所以なり、希くば斯道の藝術諸君よ、大いに茲に顧る所有て、須らく一大革新を施し、無

は可笑しさに堪へ兼ねるなり。予某日傍人に戯れて曰く、義太夫語りは白粉臭く無くては面白くありませんと、傍人大きに賛同して其言の趣味あるを喜びたり。近頃の聴客皆其れなり、女客は男太夫の生白さを喜び、男客は女太夫の生白さを喜ぶ。凡て白粉臭き是れ即ち藝人の人氣を得るの第一の得策なり。予をして斯の如き言を爲さしむるは實に予の尤も嫌忌する所なれ共如何せん聴客其者の耳の無は實に驚くより外なきなり。以上の如き聴客の尤も多きは神田區、小川町より、牛込四ツ谷等所謂書生所に多く、少しは宮松立花亭、東橋亭などの睦席には眞の聴客も無きにしも非ざるなり、今予聴客の種類を區別して見んに

▲(一)女太夫の席へ來り男太夫を賞賛して女太夫聴れぬと通がるもの

能を却け、有望の徒のみを糺合して、旗幟を改め技藝を練磨して、堂々吾が演藝界に現れんことを勉めよ。

終に臨み、記者足下に望む、足下は素より斯道の先覺者にして、而かも其耳目たるなり。斯道の事一として足下に待たざる者なし。足下等希くは吾が微衷を諒察せられ、共に俱に此斯道の改良刷新を計られんことを敢て蕪言を呈すと云爾

○聴客の改良

傳 通 生

義太夫語り年々に其技藝の下るは唯に其演藝家のみを目して不勉強を叫ぶは無理なり。年々東京の義太夫聴客は愈々悪しくなればなり。視よ寄席の中央に坐して技藝家を評するの詞を實に予の如き

- ▲(二)男太夫の席へ來り相生や朝太夫は素行に及ばぬと大聲に話し居るもの
- ▲(三)雑誌新聞を見て太夫の素行方正等を云々するもの
- ▲(四)訛り、間、等には少しも心付かず只老人なれば旨さものとし無暗に若手を悪様に云ふもの
- ▲(五)未だ交りもせぬ男女太夫が聲尻の聴苦しさを上達の見込無きと罵るもの
- ▲(六)技藝の善悪を知るの明なく何んでもこいで悪く話するもの
- ▲(七)技の拙さを無暗と褒め顔さへ悪しければ義太夫は旨さものと考へるもの
- ▲(八)ヨタ語りにも振廻しの利くを上手とし眞語りにても振廻さぬを下手と云ふもの
- ▲(九)己れの最負のみ褒め他人を悪く、云ふもの

其他數へ立てなば猶何程もあるなるべく、只、以上の如き聽客が三々五々隊をなし通がる手合は氣取り又ドースル或はドシ〜と騒ぐ、若ければ騒ぐもの老人の義太夫は通がるものと思ふ連中凡て酒屋は「この園が」柳は「一に權現」太十は「妻は」など云ふ所さへよければ其れで萬端御意に叶ふとは何たる不甲斐なき聽客等であるかと思ふと眞に腹が立つほどである某太夫曰く、ヨタを振廻すほど客は増します。某三味線彈曰く、東京は有難い所で義太夫か常磐津か數の知れぬ己の太夫が這入ますからイヤ修行も何も要りませんと演藝家に斯の如き言を爲さしむるは凡て聽客の不能なるに原因せる所なり。義太夫語りのみに向つて理屈を並べる大通先生方少しく聽客に對して小言を云ふべく、あまり、下手な太夫を非凡とか何んとか

と聽く客の多き内に客に世辭的に振り廻しをせぬなど愈々嬉しいのである。己れの語り物の聲に合ぬに論なく御殿の翌日志度寺を語りなぞする大膽は他の一寸眞似の出来ぬ語り口だ、面白味所謂ケン當節等の無きは物足らぬ思ひをする聽客に満足させる業では無いが、元來成功したと當人は思はねばこそ切前に居るので後の出世こそ望みであるらしい。老練家の小清團昇東吉梅蝶等の内へ入りて若き身に一際高調子で語るの己れ自身を引立て、居るのである。左に同人の語り曲を短評して何れ成功した曉には丁寧に評判せう△又助内、又助の腹切の息込みと物語りが尤も宜し△下屋敷、番左衛門の笑と奥庭の主従の詞は無類姫は可愛らし△日吉丸も、返り初日の演物としては如何に哉お政の詞が聽苦し、段切の無きは同人一

褒める御世辭評先生方、ドシ〜と攻撃は何故なさらぬ、義太夫語りの改良より聽客の改良こそ予の大きに望む所である。(於貴奈生投)

○有望の團洲

娛老生

有望であると竹本小清と團昇の兩人が己れの娘か妹の如く可愛がって居る。十八歳の蓄の花聲尻にキイ〜とした聲の交るは尤も進歩を證據立て、後來一方の旗頭たる價値はある。同人が綾瀨太夫の家に居た時分から綾瀨が可愛がった丈けに苦境難境を経たも今に義太夫語りの方行を變せぬは實に褒めて然るべきである。下手な綾太郎今でも上手では無いが自然と技藝の進歩して行く所が價値のあるのである。弦に離れて語るを調子外れ

寸閉口の氣味らし△鈴ヶ森、同人の語り曲でなし△御所櫻三、三忘の講釋を語りたきもやう、信夫の落入を褒めた人あり「兎若丸だ」は綾瀨的に可なり△つば坂、盲人の詞未だ語れず唯一「若へ馳上れば」より一寸よろし△沼津、平作の落入り引く息は旨し、全段評判よき割に宜しからず唯孫八とお米と追掛けと平作の息をばづませて重兵衛に敵を尋ぬる所なぞよろし△三勝、是れが離れてよろし「ハテ尼にしてなど此家で」なほ無類さはりもシツトリとして可なり△蝶八、あまり弦との振り合悪しく是れは御免を蒙りたし△太十、一寸風變りにて可なり今少し重治郎の詞に注意あるべし△御殿、唯何となく立派なり△志度寺、寸分の非なし飛切無類、價値のあるは此れを聽いて他のヒヨロ〜連と比較すべし△合邦、今少し長く

語るべく納戸では語るものが損なり△寺子屋、泣
笑はよし、いろは送り迄弦を離れては困る源藏戻
りと首實驗が語り場なるべし。

○皆さまがたへ

初代 竹本綾の助

季秋の御御神倍々御隆盛の段奉 賀 候借て此間
に五の新聞紙に私儀改名の上再び出勤致すやの
噂相立申よし承はり申候廢業このかた數なら
ぬ身の枯尾花疾くより世に捨られ申候と思ひ居候
は足かけ七年目に綾の助の名、今に噂に始り申候
とは何より面目身にあまり申候次第に御座候、實
の處は陰ながら嬉しく喜び申度儀には御座候へ共
心にあられもなき事を兎や角申さるゝ程迷惑の事
は無之と存じ候、よしんば如何なる事情の差し起

と存じ候私儀も看版を擧げて凡ろ十三年の間、海
山も雷ならぬ御最負を被り申し候まことに拙なき
技に對してたゞ々呆れはて申候程に御座候私儀
自ら藝道の未熟を承知致し居り候ものが、しかも
數年の今と相成り再び御眼見得仕り候などとは世
に申す井の中の蛙大海を知らずとの御叱りも御座
候のみならず私に於ても又幾分か耻てふ事をも承
知致し居候へば斯かる事の出來得べき儀無之と存
じ候。

右申上候次第に御座候へばたとへ此後如何なる御
方の御勸誘有之候ても又假りに如何なる事情の差
起り候とも折角神かけ誓ひ申候 志を水泡に致し
申し候儀は毛頭致し不申候覺悟に有之候、唯此上
御願申上候次第と申すは二代目綾の助儀藝道至て
不熟のものに御座候へば私を慈しみ被下候儀と

り候ても再び出勤は致すまじと誓ひ申候當初の志
に背き申候ては聊か遺憾に思ひ申候、私儀も足
らはぬ生れには候へ共兎も角人間と生れ候上は言
葉を變じ志を違へ申候事は徹塵も致し申さぬ覺悟
に御座候廢業と伴り一時世間を售り申候儀は良心
と申すものと御座候處には別して出來難き儀と辨
へ申候、嗚呼がましくも綾之助の名を他人に譲り
申候も其實、私自身に此名を握り居り候ては他日
重ねて各席へ出勤する下心ならんなど、口善惡な
き人々の噂もテラホラ耳に聞てえ申候まゝ、斯く
ては又々迷惑致す事有之候はんと存じ彼是にて終
に二代目の綾の助を出だし申候も先づ重なる原因
に御座候子を視る事、親に如かずとやら申す儀も
かね々承はり居り候ひしが自分の技能を判断
仕り候は自分より克く相解り申候ものは有之間敷

思召して何卒全人を御愛顧御評判被成下候へば老
い朽ちたる身の私喜びこよなき事に御座候。
手前勝手のお痴のみ記し御社の御紙上を讀し申候
儀は何共以て恐入候へ共實はアノ新聞紙このかた
諸所よりの御尋ね越し今までに十八通の多きに及
び一々御返事差出し候儀も相成りかね殊の外迷惑
いたし居り申候故無據 不文をも願みず厚釜敷
を忍んで斯く御訴へ仕候間何分よしなに御吹鼓な
し下され候へば私儀も實に此上もなき仕合せに
ぞんじ申候、風は蕭颯として怨みも悲しみもし
て私の心を訴へ申候程近き濱邊の芦より起り申候
數行の過鴈も又私の意中を付りてこの文を持ちさ
り申候草々

* * * * *

世の所謂堂摺黨(禁轉載)

横濱 太郎

櫻坊は筆を持つのが稼業では無いのだから。文章云々は御免を蒙る。只櫻坊の覺えて居る事柄を未知ぬ人に紹介するのだ。世の所謂堂摺黨なる者を書き前に。此東京に何年頃から義太夫が。流行つて来たかを云はねばならぬ。東京に女義太夫の流行始めたのは。明治十二年の頃なので。名古屋から信州の飯田へ興行に行つた竹本京枝の一座が。歸路のついでに寄つたので。淺草廣小路の鈴木田と云ふ定席が女義太夫の掛け初めで。女の太夫も東京で定席への掛け始めなのだ。此鈴木田の跡を倭太夫が買つて今の東橋亭に改めたので。鈴木田時分から居る清さんと云ふ男。今現に東橋亭

夫を語るのだから。わい〜と大勢出掛ける。定席では入りが有るから。其所でも此處でも掛ける様に成る。此折柄綾の助と云ふ小娘の義太夫語りが顯はれて益々衆目を引。衆耳を聳たしためたから。廿三年の五月に住の助なる小女の太夫が小住の三弦で神田の小川亭から打つて出る。之が競争の元でも有るまいが。睦派。正義派と云ふ二派が出来。別れ別れに成る。折も折とて。改進黨の投票が始つて。睦派の綾。正義派の住と。相互に鎗を削つた結果はと云へば。二万九千四百八拾二票と云ふ最多數で。住の助は兎に角勝つた。勝つた住の助は旅稼に出掛け廻り廻つて秋田の秋田屋に駐韓兵士の慰勞義捐興行を終ると。俄かに病氣に成り拾七歳を一期として。廿七年の九月七日に到頭秋田の露と消えてしまふ。卅一年の六

の番頭を勤めて居るが。始めからの事を詳しく知つて居るのは此男ばかりなので。此時分は木戸錢は貳錢五厘だつた。處が。段々上つて廿二年の貳月に京枝は小久、岡伊(今の京子の母)京久、京駒等を連れて復た上京し、一層の人氣を得やうと此度は薬師地内の宮松亭に看牌を掛けて。木戸錢を四錢に直上した。是れが例となつて一般に定席は四錢となつた。東京に於ける京枝は木戸錢直上げの元祖で。女義太夫の定席に出られる道を開いた開祖だ。徳川の末。水野越前守の爲に女義太夫は總て定席に掛る事を禁じられて。明治の始め迄は兩國の廣つ場に霞簀張りの小屋を建て、稼で居た様な譯だから。餘り世間からは。高尚には見られて居なかつたのだ。處が。今源氏節が流行つて居る様に。若い女の太夫が定席の高座で。義太

月には綾の助が其卅日限り兩國の新柳亭を名残り、にでん界の足を洗ひ島田を丸鬘に結び替へて今は濱町邊に住んで石井と云ふ人の細君と成る。此間には小土佐、越子、小房、土佐玉、小巴津、新吉小豊後。二代目住の助。誰々等各々の全盛時代も有つたが。榮枯は何者にも有るものと見え男では綾翁が逝。播摩が引いて了うし。女の方はとんと御話に成らず。僅かに伊達太夫の上京や。昇の助組幸等が来て居たのででん界は御茶を濁して居るが。實に今日此頃のでん界の有様と言つたら氣の毒の様だ。是と云ふのも無暗に義太夫總客の肩入れ連を。世間からは。混同して。蛆虫か何んどの様に。見做し。一口に堂摺黨と云つて居るが。大の間違ひだ。決して世間の所謂堂摺黨なる者は。ろんな譯のものでは無いのだ。

ける或は盛岡に於ける轉じて青森、弘前、札幌に於ける景氣實に盛んなりしと各地よりの報を其まゝに

◎寄席めぐり評判

(壹)立花亭 睡席の一なり、鐵道馬車の便利あり市の中央と云ひ且つ住來より奥深く席を取りしは結構です、改築後は市内五六の指折りの立派さ向うて右の庭は至つて狹く細きは遺憾です、天井の高いのと木口の奇麗なのは居座心地がよくあります、左の方へ一寸高い所を定連の席にしたは思付が宜しい、二階も聴きよく、高座も語り能いやうで、席主の木戸錢受取り方が一風變りて切符でも賣るやうです、中賣の東、北、詞の若い衆が田舎質氣で何んでも漢ても錢を受けとらぬ先は渡さ

才治等とす、又人形は、玉造、紋十郎を始めとし其他脱揃ひの寄合とす

●駒太夫の納會

●豊竹駒太夫は本月一日藏前の植木屋に於て納會を催せしが勿々の盛會にて午后十一時散會せり

●休席女義と寄席の改築

●竹本越子は病氣の爲め休席し友の助と若の助の兩看板はステのみに隅玉と小豊後は當席を休み小土佐は宮松に看板を揚ぐ●又寄席の改造として休業の分を記せば、高砂、金澤等にて未だ改造の済ざる分は下席を休業すと云ふ

●住の助京勝一座

同一座は曩に當地を出發して各所に興行せしが本月より仙臺開氣館に於て興行中なり其顔ぶれは住の助、團初、岡太郎、京稻、京勝等とす

ぬと云ふ風が見えますには閉口だ、今少しお小言をおツしやツては如何、其他は便所と云ひ樂屋と云ひ總て行届いて申分はないです、聽客も凡て溫和で耳のある人の多いのは何よりです。此上の贅を申さばふとんと火鉢を改良すれば白梅に劣らぬ事は受合です。あとは追ひへに出しますから善惡共に投書を頼む

●文樂座の藝題と太夫

浪花名物御靈文樂座の人形淨瑠璃は本月一日より前、双蝶々曲輪日記、大序より引窓まで、中、鎌倉三代記、切、心中天、綱島等にて太夫は現時の名人、越路、津、文字、七五三、呂、南部、司、山城、津ばめ、文、むら、富、叶等に若手の妙腕家、三味線には廣助、吉兵衛、廣作、勝鳳、三二、玉助、吉彌、猿糸、勇造、寛治郎、大三郎、

●鶴澤清花竹本清枝の一行

は北海道岩内町岩内館の開席に招聘を受け本月三日より開場其重なる演者は、清花、清枝、糸花、花造外二三名の若手揃ひとす歸京本月二十日頃也

●竹本花代と菊之助

病氣の爲め目下休席中なる花代嬢、頃日餘程快方に越き月末歸京の清花一座に加はり専ら弦に成らんと意氣卷居る由、次ぎに菊之助此程小豊後と八王子家根虎へ出稼ぎ居りしが去月末歸京し當席は休み次席より嬌咽を振ふと云ふ

●豊澤團榮と豊澤蝶子

前者は十四歳の當の花にして團吉が秘藏の弟子後者は團八が技藝に丹精を凝らしたと其に是れ未だ傳果に表れざる麒麟兒とす

男義太夫評判競 (貳)

●京子。京枝。綾の助。三吉

●與兵衛
●與太郎合評

●コリヤ〜與太郎、善玉悪玉両先生は、女義太夫は褒めれば氣がさす、悪く云へば娛戯負様にナグラレハと云ふので評は出来ぬと御逃げなされた夫れで今度は親子しての合評よ京子、綾の助の両裙ゆゑなるべく手軽く嫁げたいが▲二人共イ、女だ●義太夫がる▲インヤ顔だ●コレ〜顔の評ではない義太夫の評だわフム▲エ、京子も綾の助も義太夫語りか●實に馬鹿にも困るな東京居付の女義太夫竹本京子、本名吉田せい。淺草下平右衛門町舊綾の助の宅▲義太夫の評に戸籍調へも入るのですか●ませかへすな▲イヤハヤ何の事も鳥取縣下

ヤチャン、的の梅玉の教へさすが〜●何んだ其れは▲イヤ梅玉の三味線の假色で●イヤニよく假色をつかふやつだ▲京ちゃんは感心、初めからの名で押通すなどは今の二代目が縁故もないのに名をついで津太夫からもらつた名を三月より要なひい者にくらぶれば實に感心戀慕した〜●與太郎戀慕と云ふ事を覺えたに感心〜▲おやじさん京ちゃんが感心なのか●フン與太郎がよ、閑話休題近頃、沼津だの語るが柄にない▲近頃赤い房の付た簪が見えぬが柄にない●叱つ近頃▲又近頃か●叱つ清子と京子と並んでやはり京子の方真打の價のあるは年功ヲット修業の功が見えまづ〜立派な若手真打です▲京チャンの義太夫を聴いて涙の出た事のないのは嬉しい〜絃の京枝さん旨い▲婆さんはイヤダ●肩衣を付けて語る様になつた

鳥取市に生れ幼にして義太夫を好み大坂に至り盲人、小富太夫に教へを受け大きに得る所あり、訛裏聲、及び△節を好み●コリヤ△節とは何んだ▲ヲレの名の節だ●両裙一所になつては評が出来ぬからまづ京子の方から評するとすべし▲御親父らやん嬉しい●何んだ甘つたれるな▲これが京ちゃんの假色で●假色はよせ、何がさて豊竹岡伊の遣れ兒、老婆に付て孝行なり▲孝行も評ならずまないね●なんだソレハ▲京子がさうなら濟ないねと云ふ語呂合せ●馬鹿つ、久しく梅玉について熱心に與太夫否義太夫を語り初代の助の切三枚の花形未來は二代目どの褒詞のあつた子供京枝の絃となりて●ヤハリ京子で看板主、まづ第一の人氣取り流石梅玉、京枝さんの教へもありて天晴れ▲甘茶でカツボレ、鹽茶でカツボレ、オイキタチャンチ

は此京枝さんより起りし事▲誰れでも知つて居る●伊勢本へ初看牌を揚げて以來數十年若手を教導して女義太夫を盛んならしめし京枝さん▲婆さんの評は御免〜●相手の無い合評は出来ないから終り▲ヤレ〜助かつた二代目綾の助容姿可なりと雖も義太夫は可ならず●與太郎ツ世間様はな二代目は組幸より上だのヤレ小清、東猿等と共に義太夫を語るのと都新聞の投書に見えた仕合せの子だの▲實に仕合せの子です併し百二十段の後は不仕合にならねばイ、が●本郷の若竹で毎夜四足以上の客數不仕合せなど云ふな▲入があつても義太夫が?.....●悪玉先生の眞似は止める▲へーイ訛多くして●コレ〜▲アイ〜左様で御座いの詞●コレもう少し小さな聲で▲.....●聴へぬ▲云はないのだもの、泣落し、笑、送り、老婆の

詞、●上手なのか▲……●イーエ聴えぬは▲まづいッ●叱驚した併し流石二代目を襲ぐ程ありて客受けよく又初代に稽古した丈けありて何分か似て居る所もあり聞て居て肩の痛みもぬけサラ、くとした個所へ▲まづ味を加へ●與太郎と綾の助は敵同志で御座イ▲左様ッ●近頃相生、太夫に教へを受けて以來小富、太夫の聲は相生的に變り未だ詞など不充分なる所あれど先づ綾の助と云ふ名は詞に重きを置かぬ事故長く引延して一寸▲角兵衛獅子的ケレンも入れ●黙ッて居る最早綾の助時代でなき今日顔珍らしきとは云へ毎日の大入はお手柄、綾の三吉さんぞお嬉しかろ、扱て三吉の評▲……●三吉の評だよ▲コリヤ、●寝ぼけるな三吉の評▲ウニヤ、●撥擲さも奇麗にして叩きなども若い人としてよく津賀代時代とは雲泥の御出



評判

世まづ當今若手の大將として感心すべき人である▲ウ、鳩の評は其れ限りか●マア是れ限り與太郎手前狸寝入だな▲お終いか●さよう▲イヨ御苦勞、待ッテ居ました○次號には善玉悪玉の御兩人が柳適太夫、長子太夫の評を例に依て寸鐵人を刺す的のものされるとの事皆さんで退屈さまで

◎竹本東猿一座 (於石本亭)

東岳 (濱松) 兎角調子をはづして語る癖がある去れど言葉は勿々旨くなつて來た
東八 (お柳子別) 此嬢の藝風は花形にはチトじみ過る位なれば素より悪からう等なし去れど猿たる所であらう

今少し陽氣に語る方が前受善からん
東福 (本藏下屋敷) 聲の裕なる嬢の事とて何を語られても樂なものなり番左衛門などは殊に手に入たもの、此嬢を何時迄も口三に据置くは氣の毒なり

◎竹本小政一座 (於日本亭)

小島 (雙鏡別) 近頃師匠の一座に加入して懸命に語つたが藝評は先づ次にしやう
政、梅 (梅由) 相かはらず大の熱心家とて近頃なかく聞ける様に成た是からの勉強が第一

光の助系小福 (鈴ヶ森) 三重の語り出し先づ結構老母の詞チト若過ぎ庄兵衛は無類左れど前號にも申せし如く詠りを交へるは残念なり
東秀系宮造 (野崎) 一座の花形にして東猿師の番頭なり去れば技藝も師の妙所を寫して近時頗る上進を見る本段久作の如きは詞充分にて申分なし只お染の可憐なる思想の現はれざるが残念なり

小龜系津賀二 (玉三) 本曲は嬢の熱心と絃の車輪と相合て余程伎倆の進歩を見受けた併し詠りと云ふ大敵が未だ離れない注意すべし
愛子系末松 (宿屋) 其の節廻しの流暢なると總て淨瑠璃を龜末に語らぬが嬢の長所なり只憎まれ口を叩けば聲にはばのなきが疵のみ
勇治 (松王郎) 嬢も又節廻しの旨きには何時

も感心の外はない殊に聲にハバもあり松王の詞
など最も可し現時花形中の切前語りとして充分
の價値あり

友の助糸播志磨 (湊町) 當時花形眞打中一二を
争ふ嬢絃の變りしより技藝も不振どの評判なれ
ど流石に鍛へ込んだる咽人物の語り分けは確な
ものなり播志磨嬢の絃も中々熱心にて天晴れ花
形眞打の價ひ充分なり

團登 (太十) 冒頭より操の口説までにて切前
語りには少し物足らぬ心地せりされ嬢が獨得
の嬌咽は流石申分なし

小政 (鳴門) かゝる悲曲を演せられては先づ
當時嬢の右に出るものなからん彼の可憐なるお
鶴にお弓の接する行且つはお鶴に後の難義を懸
させまい爲めに親子の名乗りをせず追ひ返すと

適合の曲に非ずされと熱心に語らるゝ丈けに先
づ無難の出来なり

稻科糸若造 (太十) 老いて益々盛んとは嬢の事
なり其の語り口の快活なるは花形も及ばぬ所あ

京子糸京枝 (野崎) 嬢が藝風一變して以前の京
子と全く變れり彼の甘ツ垂た聲などは左のみ耳
立ぬ様になり人物を語り分ける事に注意の届き
て久作も老母も無類であつた又お光お染も申分
がない久松の詞が男女折衷して居るに注意がし
て貰ひたい

◎竹本素行一座

(十月廿九日
夜於久本亭)

素千代 (二度目) 流石團八師の仕込み程ありて
淨るりの大きいには感心なり今少し東京訛り
直すべし

云々本段中の骨子の所思はず眼に露を持たさせ
たり

●竹本京子一座 (琴平亭に於て)

京駒 (寶入船) まだ十二三歳の幼女にして京
子の弟子なり

龍子 (山良淺山別れ) 嬢が持前の美聲に克く
振りて申分なし絃も近頃餘程腕が昇つた音締且
は撥捌きなど勿々美事なものであつた

京久 (御所三) 年少女義には珍らしき流し藝
風なり辨慶など最も大きく聞かれたり

京の助糸龍子 (鈴ヶ森) 嬢は聲の點に於ては申
分なし左れど其の聲を充分に活用させる點に申
分あり今暫く熱心に勉強せば天晴れの義太夫と
なる嬢よ幸に勉められんことを

津賀の助糸三生 (合邦) 元來本段は嬢の口吻に

市奈助 (鳴戸八) ヤット見臺から顔が出る位の
小体なり左れど淨曲は巧者なり詠歌など中々
旨いもの益々勉強がかんじん

素女子 (道春館) 由の助の當時を思へば藝も腕
も上れり金藤治の詞輕卒に失したり時離れしよ
りのサワリは旨かりし此嬢聲のよき爲め一割も
二割も徳なり

素雪 (姫小松三) 當夜は越子と吉花と休席せ
し爲め久々嬢の曲を聞きたり何が扱師の門下に
嬢ありと云ひ傳ふる絃の妙腕家されば曲は如何
と云ふに本段の人物お安俊寛を始め徳壽に至る
迄年輩に適合の詞調子は流石に得心せり

素竹 (樓門) 嬢が嬌咽と節廻の流暢なるとは
皆人の知る所流石師の門中々老格丈けに申分更
らになし

住助系素雪 (岸姫三) おろよの出より段切まで

一生懸命の語り振りは頼母し、最初の詞の内に「過つる頃源頼家様云々」の源は非常なる江戸訛りは注意を頼む其外二三の難所なきに非ざれ共再聴の上委しく評することにせん絃の雪嬢、撥切と云ひ叩きと云ひ間と云ひ是れ許りは申分が無かつた

◎素行の喜内住家を聞きて

寺田露月

目今女義太夫のドツサリ株に指を折り来れば先づ以て小清、小政、嬢と東猿の四名家とす、嬢は其昔十四歳の時より先代和國太夫に就て鍛ひ込んだ技藝、且つは旅修業に星霜を重ね、一時は人形一座に加はりて床を勤めたる事とて語り振りの沈着詞の區別、着々と情に依りて聴者の感を動かすこ

に讀せしは是れ所謂師傳とやらにて、嬢が和國太夫相傳の師風に依るものなるか夫とも餘り人物を多く出しては煩雜して聴客の耳にも迷惑なりと察せしにや兎に角聴客の情を責むるは浮橋よりも老母に讀せし方却て宜しかるべし、嬢は其のど小清に譲り其艶小政程に富ざるにも拘はらず並び立て劣るなきは全く腹の出来居るものにてツマリ嬢は淨瑠璃の骨よりも肉よりも其情を語るに於て最も巧みなるものと言ん歎、且つ其語り振り嚴格にして犯すべからざる藝風なれば隨て武張りたる物善く世話物よりは時代物の方旨し去りとて又柳、小磯原の如きも得意と評さるゝ内の呼者也併し人は柳の木遣を賞め磯原には追分節に拍手すれど木遣、追分節共に曲中の主腦に非ず、何は扱目今得易からぬ女太夫にこそ

と宛ら活劇に接するの思ひあり、其の語り物多き中にも別けて本段の如きは女義太夫中他に較ぶべき人を見ず、其旨さ其遊さ、一種云ふべからざる味ひあり、喜内は何處迄も侍氣質の老の一徹目前に畫かれ重太郎の口と心の裏表を詞に包む丈夫魂など語り得て妙、女房おりゑが詞づかひ「此兒が有ては柳になる」と「モ一度思案仕直して」云々のあたり切なる心中擦むしる思ひ、又は戸の隙間より差覗き」の所皮肉の廻し方殊に末段書置を讀む處は茲ぞ嬢專賣の長所とも謂ふ可く一語一句涙を咽に詰らせる語調は老母よりも聴客の方涙に咽びたり「今朝買たてんぶの曲物」と「裾の切れた綿入」云々の件に至つては正に満場を涙にうるはしめたり、元來この書置は浮橋が此場へ出て來て讀むが院本なれど如何なる都合にや嬢は老母

◎綾の助一座短評 (於小川亭)

梅八 (山別れ) 詞も節も餘程旨く成つた近頃勉強の功は恐ろしいものだ此上共に娛修業が第一である

福久 (忠六) 其語り振りの巧者且つ流暢なる節廻し勿々口語に置く代呂物でナイ勘平の切腹後の言葉など老巧と申して差支へない
花の助系若廣 (揚屋) 顔に似合ぬ聲に銷あり語り振り落付充分にて申分なし、今少し腹に力を容れて語るべし

登壽系政吉 (鳴八) 聲も可し振りもあり先づ若手としては可なりの出来なり兎も角一生懸命と云ふ丈は何より嬉し

朝の助 (太十) 初日の出し物として十段目まづ枕の語り出しは可し初菊は色氣に乏しき感あり

左れを嬢はハバのある聲とて重次郎の出陣且つ光秀の出は大きく申分なし兎に角目下花形中屈指の人氣者なり

文、福、(赤垣出立) 一座のドツサリとて道に貫目あり殊に本曲は十八番もの、一にして源藏其人を詞の上に現す事妙なり彼所等が老巧と申すより外はない

綾の助系土佐尾 (鈴ヶ森) 或人曰く本曲は眞打の語る者に非ずと言へり去れど此曲眞の語る者に非ずとは紙數の少きに依るか又は手はどき物として蔑視したるに依るか左る理屈は差し置き今嬢の本曲を聞くに時代、世話兼備の花形眞打とて流石に丸一段を叮嚀に語り畢りぬ扱て淨曲の評は預りとして土佐尾嬢に就て一寸憎まれ口を記さんに弦は三吉より音締如何去れど太夫を

が見えず、兄はアレあの様に臆病者」云々の語を抜かしたるは、大に不可なり、この語ありてこそ後に傳兵衛の來る時、大狼狽、與次郎が胸り起ると明る門の口」及「一人にては手が廻らぬ、ろなたも加勢して下され、加勢くと、うろく狼狽」及「こわく」ながら側に寄り」等の語、充分活動するにあらずや、然るに、此必要の語を抜きたるは、甚不感服の至なり、然れども、與次郎の性情を充分聽客に飲み込ませ得たるは、流石熟練の名手とや言ふべき、母のお俊に意見する所今少し、泣かせてもらひたし、與次郎の方に餘り力入り過ぎたる故にや、母の方は少し手ぬるさ様なりし「ろりや聞えませぬ傳兵衛さん」以下のサハリ、無難なり、艶を好む者には、大受け大當り、最後に與次郎が猿廻しの唄は、猿廻し

樂に語らせる様の間などは流石なり太夫も無かし語り易からんと思ふ……

●朝太夫の堀川

昔の家小太郎

この程竹木朝太夫の堀川猿廻しを兩國立花家にて聞き得たれば聊か思ひ當りし所を左に記さん、コハ豫てより聞かんとて待に待たる語物、殊に松太郎及び猿之助のツレ引、たがひに相待て其妙味實に忘るゝ能はず、まづ「同じ都も世に連れて」の語り出しよりして「女肌には白無垢や上に紫藤の紋」以下の鳥邊山の唄、艶充分にして節廻しの巧みさ實に得も言はれず殊に「あの面白さを見る時は」など大に佳し其より與次郎歸り來りてより始終其實情を寫されたる所、目前與次郎を視るが如くなり、然れども、後に母の物語に「此母は目

丈ありて、優美にあらず、さりとて又野鄙にも流れず派手に賑かに演られし所大によりし、尙他にも評したき所もあれども先は略しつ

●文字之助の寺子屋を評す

京橋 霞 の 家

初登りの事、腕前のはど如何あらんと早速駈付け寺子屋を聞き得たれば取敢ず走り評を試みん先づ嬢の義太夫調子早きに失せざるか、寺子屋の冒頭を抜きて「どりやちの子と近付に」よりいろは送りの末段迄丸こかしに約一時三分とは時間己に短きに過ぐ以て足の早きを知るべきなり、次に松王玄蕃源藏の調子の區別あまりさやかなりとは云はれず尤も流石の嬢なれば詞に混雜を來す様の事はなかりしも目を閉て聞く時は各人の腹能く語氣に表はれざりしが如し千代と戸浪とに於ける

も又同じ、第三源藏松王共に貫目足らず特に松王に此感多かりし松王の表中真に松王らしく聞えしは首實檢の際に於ける笑ひのみなりし、尙嬢の聲地の滑り實に快く廻されど其が爲めかあらぬか詞の重味は却て薄く語氣に抑揚を要する所も往々平々と語り去られ深く顧みられざる如きは遺憾なりし、全般に就ての評は茲に止め次に詞を檢せんに「ハテサテそなたはよい子じやな」の一節は詞稍早く聞えしも源藏が漸く身替りを見付たる喜びの意極めて能く表はれたり、是非に及ばず首討て渡さうと」は愛の含み方充分ならず「あれか……これかも」思入の間少しく短し「死出三途の御供と胸をすゑたが」の語氣抑揚頗る巧みに「いや其手では行くまい……エ、コリヤやい若君には代へられぬ」のかけ合忠義のために鬼に成てと云ふ切な

鹿念」は語氣弱しこは思切りて大きくする方實情ならん松王の笑は頗大くこれにてこそ首實檢に充分の貫目はありと思ひぬ「フム是や菅秀才の首討たはまがひなし相違なし」前後語氣の轉化極めて微なれば充分とは行かねど松王の心持は稍表はれたり「餘り嬉うて涙がこぼれる」は實情表はし得て妙「イヤ奥に子供と遊んで居ます」此一句勿論大抵の女義平々と語り流すものなれど實際ろんな平氣な場合にあらず嬢には多少の注意あるべしと豫期せしも空頼めなりしは遺憾なり然るに千代の「フムろんなら連れて歸りましよ」は不審の思入あまりに重くろしくて男らしく聞えたり「お役に立て、下さつたかまだか様子が聞きたい」稍輕過ぎたれど節廻しの旨さ東猿嬢のと好一對なり、梅は飛びの歌は一通りなるが「世上の口にかゝる」を

き場合戸浪の心弱さも源藏の決意に勵まざる、所面のあたり見る心地せりされど此上出来には似ず次の「鬼に成てど」の一句は平々と語り流されて何等の感覺も與へず源藏の詞「母御の因果か」も少しも聲にシラレなくて「あの子の業か」に續かず「報はちが火の車」といふ承け詞にも移り悪く聞えたり、子供を呼出す所一人一人の語り分は能く注意されたれど「睨みつけられろ、こはや」の一句嬢もオホ、こはやと語られるは大方先人の型によられたる事なるべけれどオホ、の笑ひは非なり斯くては村の者共松王玄蕃を鼻の先で嘲弄し居る様に聞ゆるなり流石に故綾翁は此處を軽く「ヲ、こはや」と語られたりき、首實檢の處三人掛合の光景は巧みに表はし出され稍得心したり松王に念を押され源藏のせき込「ヤアいらざる馬

詞にしたるは如何にや「推量あれ云々に續く具合よりも詞としては感薄く思はるゝなり「どうマア内へ近るゝ物ぞ」にて充分に泣きたるは大賛成なり之が爲めに「死顔なりともより以下感情特に深かりし扱一段中の最難關たる松王の泣笑に至りては初めにハ、と大きく笑ひ後泣三分笑七分に流して最後に齒を食ひしばかりて男泣きに終れりこれも泣笑ひとして可ならぬにあらぬぞ何方かと云へば我はむしろ東猿嬢の如く五分五分の笑ひと泣きの終りを笑ひに落す方感深しと思ふ蓋し嬢の義太夫は足早きがため詞に重味を欠き思入に感薄く時に抑揚の著しからぬありて語り振りの巧妙なる割合には充分我等に満足を興へざりき然れども聲美に節調ひ宛轉たる地の文句の滑り何とも言はれぬ妙あり思ふに嬢の得意は艶物より時代物にあるべ

し嬢よ希くば益々勤めて本場鍛への眞價を知らしむる所あれ

◎素人義太夫短評

花菱 漁 夫

○團合連十月十五日於
外神田福田屋

團合連は、豊澤團八の連衆にて、當夜露拂として其の内弟子なる時子先づ語り、次に蝶子語りたり、二嬢共に後來有望なれども、連外なれば評せず。さて番組は、近八(南海)五斗(住江)沼津(壽山)酒屋(壽鶴)伊賀八(一力)にて、愚評左の如し。

○近八(南海)諺に、近江の八か、伊賀八かといふ位の代物にて、府下各席に於ける太夫の出し物にも、遂に見當らず。僅かに先年故綾翁が、

新聲館の人形に語りたる外は、女太夫の故鶴澤といふ見識は、流石に大達物たる資格を失はずさて宗岸と半兵衛との問答より、奥の書置に至るまで、情あり色ありて申分なし。只サワリと歌とを彼此に聴衆もありしが、此は朝や伊達の色ばい、狂人じみたお園を聞き慣れて、真に愁に沈むお園の情合を知らねばなり。綾翁の價直は、此の前受の悪き處にあり。眞の淨瑠璃を聞く者、その味ひを知らむ。

○伊賀八(一力)「既に其夜も」の一句を聞いて、全段の價直と、丈が貫目とは定まりぬ。捕手の間の呼吸、對面の間の聲氣、共に申分なし。彼の「來いと云たとて」の繰絲の歌に至りては、綾翁以後聞かざる所、此歌のみにても、當夜のドツサリとしての價値充分なりき。

花友が語れるを聞きしのみ。さる六かじきものを、何の苦もなく語りてなされたるは、後生畏るべし。

○五斗(住江)丈が得意の語物にて、善く綾翁の模型を學び得られたり。生酔の處、今一段呂律の遣ひ方、工夫して貫ひたしとは、聴衆の慾なるべし。要するに首尾貫通して、大に聴衆に満足と與へられたり。

○沼津(壽山)外神田の名物たる丈は、例に依て例の如く、何の臆面もなく、易々と丸こかし語りへたり。殊に丈は、足早きを以て、聴衆を倦ましむることなく、喝采の中に舞臺を下りたるは、大出来く。

○酒屋(壽鶴)丈は故綾翁が高足にて、語物の大小を論せず、濫いもの、艶のもの、何でも來い

◎素人義太夫大集會(十月二十一日於 神田松本亭)

白眼居士

○かつら(又助)丈が得意の語り物なれば悪かるう筈なれど今一息と思ひしは又助の手負後の詞なりし

○美家古(沼津)平作、重兵衛、お米共確に語り分けられたるは大手柄と云ふべし當夜丈は腹がうすかりし故夫れたけが玉にきす

○美喜(本藏)丈は近頃メキ、と藝が上がつた去れば本段なども餘程功者に語られた奥庭に至りて主従訣別の情合など感服の外なし

○松葉(廿四孝)流石新兵衛師の稽古だけ有つて沈着て語られたは感心勝頼、八重垣姫、申分なし。ぬれ衣は今一息で有つた謙信も、先可し何にもせよ斯道に取りて未だ半年にして此位にて

なさるゝは後來有望なり
○糸雀（油屋）其夜のドツサリとして大出来なり
しが前號に本段は評したれば次號には他の語り物に付て記すべし

◎鶴澤鬼若さらへ

（十月二十九日於
浅草植木屋）

三拍 樵者

○君子糸鬼若（柳）未だ七歳位の小女にして中々旨いもので有つた節廻しなど輕妙なりし

○鬼笑糸鬼若（新口）丈は床に馴れぬと見えて浮雲げに稽古の通りを熱心に語られたが今一層勉強して功者が付たら適れの語り人に成るで有ら

○都昇糸鬼若（合邦）「深たる夜の道」の巻頭嚴肅に合邦、及老母の詞大出来「蘆の浦々」のサワ

○和十糸豊次良（橋供養）全段とも鎗の入れ場無く聽着の靜肅なるは流石に親玉の親玉たる所なり後日再聽の上評せん

◎五睦連さらへ

（十一月五日於
外神田福田屋）

○如誠糸燕作（又助）予の福田屋へ參着せしは六時半なりしが最早丈は段切にて場内大拍手で有つたが殘念ながら評は次ぎまで御預り

○和十糸燕作（大文字や）本段の如きを容易にヤツテノケらるゝは流石なり榮三とお松及び助右衛門の意中なぞ能く寫し出されたり醍醐節は一工夫ありたし

○和紫糸豊次郎（戀十）「おろばの衆に」より語出された扱て重の井は充分與作は今一息で有つた

りは喝采であつた「納戸へ」にて拍子木は惜むべし

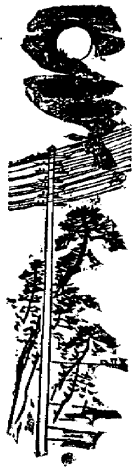
○くら糸才三（宿屋）丈は音聲美にして節曲も能く先づ若手にしては非凡の上出来なり去れど一寸申度きは人形の位置にて總て岩代の詞など右へ向つて發音されば岩代の位置を失ふ道理なり御注意迄の老婆心

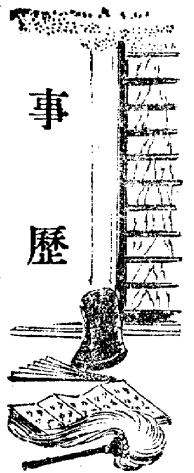
○政子糸才三（日吉三）此嬢聲のフツキラざる爲めか自分の思ふ様に語られぬ様子であつたが五良助の詞も充分サワリも旨いもので感服く
○花蝶糸助三郎（柳）淺草で屈指の一人だけ本段も非凡の出来「必ず草木成佛とを」の邊りの節曲殊に能く平太良の「さればでござり升」よりの俄か盲目の調子確に其人を寫し出したたり木遣りは一通りなりし

「坂はてるくの」歌は歎きを含んで申分が無かつた

○和聲糸燕作（堀川）先づ二上りは清艶に莊重に美聲の丈の事として申分なし母の物案じ與次郎が臆病の具合も先づ一通り「ろりや聞えませぬ傳兵衛さん」以下のサワリに至りては節曲流暢にして巧妙と云ふべし

○孝玉糸豊次郎（瓢箪棚）丈が當夜の語り物は余り素人耳には聞なれぬ物故聽者はかへつて靜なりし予は女義の關井及び他に兩三回耳にせしが其夜の出来はおそのの詞も先づ可く殊に友平が間腹の思想に於ては大出来なりし





◎藤井小勝翁

(開卷第一面寫真參照)

人の短を言はず、我が長を語らず、超然として義太夫界に獨立せるもの、我、藤井小勝翁を推す。翁は、天保四年十月廿三日、攝州兵庫北仲町に生る、藤井某の男なり。年甫めて十一、大阪に出で、兩替商何某に仕へ、専ら心を營業に用ひ、諸事に忠勤なりしかば、主人も又なきものに思ひ、目をかけて愛憐けるとかや。こゝに兵庫東出町に、焼酎釀造元にて、旁、米商を營む八木彌三兵衛といふ人あり。家號を綱屋といふより、綱忠といふ

始めて福原大椽を師として學びぬ。かくて稽古の功を積み、月會順會などに出席して、やゝ名を人に知られられども、曾て游藝の爲めに、一日も片時も主人の間を欠きしことなく、いと謹直に勤めければ、主人も翁が簡程の藝を知らぬ程なりきとぞ。大椽七十三歳にて世を去りしかば、翁は暗夜に燈火を失ひし如く、歎き悲しみけるが、後長月庵十三に就いて學びぬ。十三は道修寺町の藥種商、鹽野屋の惣本家にて、本名を小牧藤次郎といふ。この人至つて多藝にて、茶湯、插花、俳諧より、基將基賭事にいたるまで、其の道を究めずといふことなく、殊に義太夫に至りては、當時雙ぶ者も無き程にて、一座のドンサリたる太夫すら入門するものあるに至れり。今の大隅太夫なども其の一人なりきとかや。さて其の語物數ある中に

て、兵神灘目をかけ、素人義太夫界第一等の語人なりき。斯人の師と恃みしは、竹本越前大椽目染太竹本長門太夫代にて、善く其の口吻を學び、尙我が工夫と鍛練とに由りて、天晴の語人と持てはやされ、遂に名を福原大椽と改められき。さて其の語物は、時代と世話とを問はず、ドスとツヤとを論せず、如何なるものにも、巧みに語りこなされけるが中に、人々の最もも感歎せしは、近江源氏八、日向島、薄雪、大安寺、千軒長者三などなりき。さて、米商の事とて、月に幾回となく堂島へ往復せられける折に、翁が許を訪うて義太夫の物語せられしを、翁も性得好める道とて、技癢の念堪へがたきを、奉公の身なればと、自から戒しめては、思ひとまりけり。年廿歳となりて忙しき中に、いさゝか閑の出で來ぬれば、こゝに

勘平鎌腹、瓢箪町、廿四孝三、紙治茶屋等は、最も人を感動したりといふ。翁また善く其の型を取り、其の聲氣口吻、人をして十三生寫の思あらしむ。されば、翁が技藝は、綱忠に創まりて十三に大成したりといふも、強ち謬言にあらざるべし。翁、常に謂ふ、一口に素人くんと、世の人さみすれども、素人にこそ却つて名人は多けれ。さるは太夫は、謂は、役目にて、樂んで語るよりは、已むを得ず見臺に向ふもあれば、こゝぞといふ處のみ心に心を用ひ、ろの佗は程よく語りこなして、只前受の宜からんやうに務むるが多し。素人は然らず、冒頭より結尾まで、一字一句といへども、吟味に吟味を加へて、丁寧に切實に、いさゝかも油断なく、聲を惜まず、力を惜まず、前受は兎もあれ、其の人物性行を語り分けんと務むるからに、

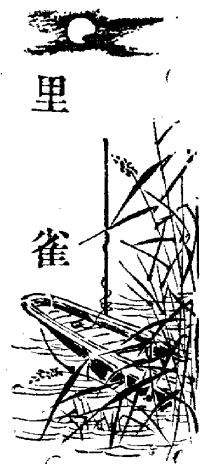
かいなでの太夫等より視るときは、無駄骨のやうなれども、まことの太夫は耳を傾くるなるべしと實に此頃は、素人に名人多かりき。翁は、此の名人なる福原大椽と、長月菴十三とに由りて技藝を成就したるなり。尙前後に於いて師事せしは太夫には、竹本竹前太夫、竹木住太夫人、三味引には鶴澤才治、豊澤勘治郎、豊澤廣作、豊澤廣助等なりき。翁藝名を湖静と呼び、當時少年の語人として、到る處に名を轟かし、小勝と相伯仲せり。小勝は、先年物故せる竹本綾瀨太夫の素人名なりさて小勝、相生と改名して、太夫となりしかば、同好の人々、小勝の名の、ろのまゝに理もれんことを惜み、翁に勸めて襲名の事をいふ。翁、辭しけれども、猶すゝめて止まず。以謂らく湖静と小勝と國音相近し。今強ひて之を辭して、人々の意に

て、竹本熊玉、鶴澤文瑠等も、就いて學びぬ。今此の人々の教へを受けし外題を擧ぐれば、勘平鎌腹、瓢箪町、二十四孝三、三日太平記九、宗玄庵室、安達三、菅原四、合邦下の巻、忠四、二度目平右衛門腹切、講釋七、吉祥院、御所櫻三、熊谷陣屋、加賀見山又助内、さて予に傳へられしものは、大安寺行本に無き所也。沼津里作腹切まで志渡寺、箱根饒別より天神境、一枚も抜かず、伊賀越八、彦山五、八幡引窓等にて、尙教へんと云はるものは、布四、紙治茶屋、箱根瀧、八橋村、長兵衛内などなり。さて常に三味線なくて語ると得ずと、歎息せらるゝものは、長柄の人柱、小栗の三段目等なり。以つて翁が藝道の奥底知れぬを見るべし。然るに翁、超然獨立して、人の短を言はず、我が長を語らず、人と應對するに、謹厚寡黙

忤らはんよりはとて、遂に小勝の名を襲ぐこと、なりぬ。當時此の二人の、如何に世にもてはやされしかを知るに足らむ。翁ことし齡七十歳、頭髮斑白にして、齒一枚だに留めず。まかも鬢鏤とし、壯年の如く、其の淨瑠璃を語るに及びては、神出鬼没變化極りなく、人をして端睨すべからざらしむ。たまゝ賞賛するものあれば、此れ福原大椽、長月菴十三の模倣のみ。不才にして、ろの十が一をも真似ること能はず、洵に愧かしき藝なりと、謙遜概ね此の如し。されど知るものは知ることなれば、翁が只管いなむを肯かず、強ひて教へを乞ふ者數多なるが中に、故竹本織太夫、竹本文太夫、竹本錦太夫、又素人は枚擧に遑あらず。さて東京に移住せしより、鹿聲、梅翁、語遊、北玉素狂、梅石、大子、喜双、遊鶴、和樂及び予等に

にして、一見田舎爺の如く、何人が淨瑠璃を語るとやうの風采あり。古語に云はく、良賈は藏めて虚しきが如し、諺に云はく、能ある鷹は爪を藏すと、夫れ我が藤井小勝翁を謂ふか。附けていふ、予この事歴を編纂せんと欲し、翁に問ふこと度く、なりしも、名聞は願ふ所にあらず。大阪に在りし間も、大會の摺物、又は素人番附などいうて、種々の申込ありしも、皆これを避けたれば、今さら物に書きとゞめられんこと、洵に迷惑の至なりとて、肯なふ氣色も見えず。僅かに撮影することのみを許されたり。されば、この事歴は、予が四年間、翁に親炙して、見聞せるまゝなれども、中には見あやまり聞きたがひ無しとしも云ふべからず。看心人の心してよ。

○竹本素行門下并に竹本京子竹本京之助豊澤團榮諸嬢等の事歴は紙面の都合により次號へ掲載する事とせり



●綾太郎の團洲小清一座に入りてより余程貫目が附て来た(成田屋) ●三子津賀の助と改名したが三子の方が別嬪らしく聞えてイ、(八丁堀兄) ●京の助無暗に見臺を叩く悪い癖だ(世話焼) ●小川亭の茶番大入にまご(立聞生) ●團光折角津賀の助とは何たる大入だ(立聞生) ●團光折角津賀の助の系に成つたが例の癖さんが彼是言はナキヤ宜が

と小政、小清の一座位だ(樂屋観) ●鱗さんと兵吉さんの高座の座蒲團は立派なもんだ(實見舌) ●素行師或人に語つて曰く他人の品行を咎めんと欲せば宜敷自身を三省せよと(立聞生) ●伊達太夫友松の一座は明年の四月頃まで當地に止まること来る一月の初席は東橋亭と決す(行司) ●吉春嬢傳界の淨海を御き籍を醜業の一部に置く蓋し是れ色情の餘波より起る慎むべし房事(神田朴訥生) ●和聲文の太十は恐らく府下に立づく人は無からふ(素人好老人) ●淨瑠璃を熱心に稽古を教へる師匠は團吉師に限る(僕一任) ●近頃上京せし女義太語り吉花、伊達の助、七五三の助、團洲の四嬢と文字の助とを伎藝上より顔付けせば先第一番が吉花二番が伊達の助三番が文字の助に次が團洲に七五三の助と思ふ(四斗太郎) ●伊達の助は淨瑠璃を語るに云ふ點より言へは吾等は先づ當時若手の横綱と決す(榮蕃長) ●素竹嬢の絃頃日一變して素晴らし丸で男の腕と變らなくナツタ(淺草矢の字) ●貴社の社員中心童氏は素人義太夫が受持だと云ふが僕等の凌ひなきへは頼と來られない(赤坂山の

(心配生) ●京子近頃音聲を損じて居る夫も其筈よ田の下に力が出來たから(驚太郎) ●僕は素女子と云ふ可愛兒が大好きなのよ(由坊) ●吉春色男と逃げてより綾重、花柳、米八など云ふ一騎當錢の人達が眞似をしたとはあやしげな世の中だ(芝赤門生) ●花の助の姉貴毎夜寄席迄シスターの保護に行く是には曰くが有さうな(聞度紋木) ●日本亭の仲賣新公は意氣で氣がきいてる(定連) ●梅登を眞負にした鬚先生ひと鐵砲を喰つて近頃梅チャンを罵しつて居るとは○○の巢が知れぬ(市川梅好) ●伊勢本の定連の何某は美根登に夢中で△(焼餅生) ●綱春を余り褒め過ると京柳とか云ふ人が焼ますよ(京橋生) ●伊達太夫と小清とは近頃腹が薄く成つた様だ(心配陀) ●伊達の助の忠九は娘義太夫に稀な出來だ僕は當時若手の隨一と思ふ(善坊頭) ●京橋壽連の松葉さんは義太夫がなか(旨いのよ) ●鈴チャン) ●私は糸雀さんが一番好よ(勝頼公) ●開化につれて世の情態が變になる婆々義太夫色氣附くととは驚くツキ(暫居生) ●女義太の樂屋で嚴肅なのは第一番に素行の一座

神) ●昇の助昇菊早く上京すればイ、が若し何なれば昇菊だけでよい顔が見テ(神田くま子) ●朝さんの吉田屋が聞きたいのよ(チヨイト次席に出して貰つて頂戴な(中年増) ●娘義太夫語りの親々は總て大天狗で困る我娘より旨いものは無いと思つて居るには手がつけられぬソコデ娘が生意氣になる自然と藝がヨタを語る様になる注意あるべし(老婆心唐) ●高座へ出る時顔に粉白はいしが手にも少しは塗るべし三味の方などは面白く手黒く丸で何やらの看板見る様だ(メカ一、十) ●相生さんの菅原を聞きましたがいろは送りは世界中におまへん位宜しあした(カキクケ子) ●東秀嬢の住所と本名御存じの方は知らして頂戴(聞鯛生) ●水新傳組稻丸君の住所と本名が聞度(君廻家白味) ●鶴澤清花北海道の何處に興行し居るか知り人に問ふ(僕駄) ●素女子嬢近頃壯排に百度の熱は眞かしら(樹の家斗) ●東福嬢は初めから口三で高座に出る何時迄も小供じやあるめえ今少し深い所へヤツてヤリね(好福先生) ●清花の門人糸花に台灣熱にて夢中の者を掲ぐれば佐々木四百五十度

社告

●本誌芝居の一欄は受持記者病氣のため劇場廻りを欠きたり依て號本には劇評を省けり次號には市内各座の劇評は申す迄もなく各地の景況等に至る迄漏れなく掲載致すれば會員諸君に謹告す

●會員諸君の芳名は明年一月新年の第一號を以て發表致すべく候間續々御入會あらんことを希望す

廣告

●耳鼻咽喉病診療 午前

東京市神田區柳町一番地

本郷伴藏

(四十五)

金子四百廿五度稻丸三百五十度増田五百度一心樓六百九十三度杉村七百五十三度半とは恐ろしい熱じや果して然らば糸花は人殺しの罪はのかれぬて(風聞生) ●登壽と云へる別嬪を或るパンクの若旦那がチャホヤと騒いでござるとさ(京童) ●春善とか何とか云ふ奴近頃女義太の太鼓持に成つたといや又琴の音は格別サ先頃某家の招待で琴界の大達者山登先生と某家の令嬢とシテワキにて調べられた曲の名が石山源氏さうかと云つて何も光源氏か堅藏になつた譯では無い絲さばさし和らかで美しきこと得も言はれぬ是迄高等演藝會で諸師の琴を聞いたが万和先生程の技は始めてだ、だによつて松川君始め落合、小林、青柳なんといふ腕揃へが澤山ある僕太棹を投げ出して閉口の外なした記者先生そんな事つて胴する撥あたりめがど叱りたまふな(○○山人) ●常盤津清元一中河東音曲といふ音曲は何でも持て来いドシ〜持て来いサアサ持て来い〜 (編輯局小僧)

◎義太夫稽古案内

(但し會員にして稽古屋を兼ねしもの次第不同)

○全	日本橋坂本町	野澤	玉造	○全	鳥	森	○全	本郷區金助町	竹本	祖若			
○全	彌敷町二	花澤	梅之助	○全	淺草區材木町	鶴澤	市太郎	○全	元町二丁目	竹本	岡信		
○全	鐵砲町	竹木	久吉	○全	吉原揚屋町	鶴澤	和國翁	○全	本郷四丁目	竹本	蛟龍軒		
○全	全	鶴澤	友子	○全	猿若町	竹澤	龍造	○全	春木町二	竹本	綱花		
○全	濱町二	鶴澤	民造	○全	福井町一	竹本	織王太夫	○全	天神町二	竹本	庄之助		
○全	本石町四	鶴澤	團吉	○全	廣小路町	鶴澤	鬼若	○全	小石川掃除町	花澤	宮次郎		
○全	濱町二	鶴澤	燕作	○全	馬道五	豊竹	照吉	○全	全江戸川町一	豊澤	廣之助		
○全	全	鶴澤	民壽	○全	壽町	竹本	清助	○全	全	餅差町	竹本	紋久	
○全	全	鶴澤	民子	○全	北東仲町	花澤	巴若	○全	全	表町	鶴澤	彌玉	
○全	通四丁目	鶴澤	一子	○全	西島越三	鶴澤	清春	○全	下谷區黒門町	豊竹	清藤		
○全	彌敷町二	野澤	語玉	○全	田原町三	竹本	勝信	○全	全仲徒士町二	鶴澤	清代		
○全	全	豊澤	松鶴	○全	田島町	豊竹	龜玉	○全	全稻荷町九七	鶴澤	照司		
○全	全	竹本	氏豊	○全	小島町	豊竹	岡徳	○全	全下車坂町	鶴澤	仲秀		
○全	中洲	竹本	殿太夫	○全	黒舟町	豊竹	巴生	○全	全竹町二八	鶴澤	才三		
○全	濱町二	鶴澤	文昇	○全	神田上白壁町	鶴澤	文京	○全	全本所區綠町一	鶴澤	兼太夫		
○全	京橋加賀町	豊澤	大助	○全	宮本町	鶴澤	律太夫	○全	全綠町五	豊竹	兼太夫		
○全	木挽町九	野澤	左衛門	○全	平永町	鶴澤	音五郎	○全	全	外手町	野澤	喜之助	
○全	一丁目	豊澤	新兵衛	○全	全南佐久間町	鶴澤	駒造	○全	全	深川區万年橋	竹本	柴の助	
○全	中橋泉町	竹本	巴菊	○全	松永町	鶴澤	鶴玉	○全	全	麴町區麴町一	竹本	紋濱	
○全	南金六町	鶴澤	豊造	○全	富松町三	鶴澤	清花	○全	全	下六番町	鶴澤	廣清	
○全	牛込神樂町二	竹本	隅造	○全	表神保町	鶴澤	喜光	○全	全	横濱相生町三	鶴澤	文致	
○全	矢來町一	竹本	咲壽	○全	松富町	鶴澤	才造	○全	全	常盤町三	鶴澤	彌惠次	
○全	芝區	田村町	竹本	筒太夫	○全	五軒町	花澤	扇七	○全	全	三	鶴澤	九藏

●淨瑠璃雜誌社本領

淨瑠璃雜誌は義太夫社會に於ける羅針盤にして本誌を以て一に技藝家の敵手となり好義家の談友となり忌憚する事なく、張權するなく不偏不黨、縦横経緯、評し去り評し來り、専心一意、實に是れ淨瑠璃界の指南車を以て自ら任じ、尙ほ且つ聲絃海の燈臺を以て自ら居るものなり、其本誌が斯道發育の上に於て現はす所の結果如何は、請ふ第三號以下の本誌に就て是れを見よ

●投書家規程

●原稿は楷書にて可成明瞭に認め、一行廿二字詰の事「但し句點の下一字をあますこと」
●本誌上へは匿名にて掲載を望まざる、其原稿末尾には宿所姓名を詳細に記されし
●投書は長短を問はざれ共可成完了のものに限る「但し政治、猥褻、人身攻撃に係る記事は都て没書とす」原稿は一切返戻せず
●原稿御送付は淨瑠璃雜誌社編輯部宛の事

●本誌定價及廣告料

●一冊前金拾錢●郵税一冊金壹錢●見本は郵券拾壹錢を要す●廣告料は五號活字廿二字詰一行金廿錢●半頁分金三圓●一頁金五圓●特別廣告一頁金八圓とす●以上は何れも前金の事●連載の向は特別割引す

●注文方法と規定

●爲替拂込局は「神田郵便局宛の事」●請取人は「東京淨瑠璃雜誌社」宛とす●郵券代用は一割増の事「但し一錢券に限る」●本誌は前金に非ざれば發送せず、前金切れたる時は發送を停止す●代金領取証は發せず、本誌發送を以て證とす●特に領取證を要せらるゝ時は端書一葉を添へらるべし●本社への照會書には返信用郵券或は往復端書を要す

●稟告

今般我社内にて義太夫會なるものを設け汎く會員を募集す「但し營業人素人を問はず」會員は一ヶ月會費として金拾錢を前納する者とす會員には毎月發行の淨瑠璃雜誌を無代にて配布す會員にして誌上に記事を望まざる、諸君は適宜たるべし「但し六十行を限りとす」
右御賛成の上續々御入會あらんことを
東京神田區駿河臺鈴木町十六番地
東京淨瑠璃雜誌社内

義太夫會事務所

下谷區二長町三番地
淨瑠璃雜誌編輯部
全支部

麴亭主人序
虹村鳩の舍主人著

東京夜の花

全壹冊四六判紙數二百頁
定價金貳拾五錢郵稅四錢

此の書は東京市内に住する藝妓娼妓女義太夫を始め夜に至れば本業にかゝると云ふ代呂物を善惡共に其實談を蒐めたるものなれば或は思ひ半に過るの怪事あらん請ふ發行の期を俟れよ

發行所

東京淨瑠璃雜誌社
神田區駿河臺鈴木町十六番地
○電話本局一九六八番

女義太夫美術寫眞

第一編壹部定價金壹圓郵稅壹部金六錢
但し義太夫會員は二割半引

右は近時歐米に専ら流行する「コロタイプ」着色版にして寫眞よりも一層高尚なり裏面には各自の履歴等を別紙もて印刷成したれば近頃類を見ざるの珍書なり

發行所 西寫眞版 合資會社

發賣元 萬卷堂出版部
京橋區京橋水谷町
神田區駿河臺鈴木町十六番地

義太夫肩衣

御好み
次第

右は今般新柄切れ地色々着荷仕候
但し御注文の日より三日以内には

義太夫
肩衣の調進所

日本橋區住吉町廿二番地
竹本小政内

市川金次郎

義太夫三味線

附屬品一式

張り替へ

直し
入念

右は一層勉強且つ日限も必ずお約束の日には致可候
間何卒御用向の程奉願上候併し近頃無人の爲め御得
意様へも不廻りに相成候へ共御用の節はがきにて
御一報被下度早速參上可仕候其節端書代は御返戻可
仕候 ●お急ぎの向は其日に張替へ可申候
淺草區藏前菊岡事

義太夫
三味線調進所

尾上源次郎

御待合

中むら家

牛込區津久土前町十五番地

牛搾取配達

齋藤牛乳店

淺草區東三筋町

竹中板義太夫本調進所

大坂五行

神田區表神保町七番地

上方屋支店

御化粧用

全國到る所の小間物化粧品店にあり

天狗洗ひ粉

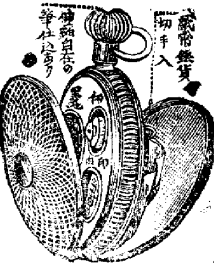
袋入金壹錢
罐入金五錢

此あらひ粉を常に御用ひの方はさめを細かくし美人
となること請合

東京淺草區老松町

本舖 榊みよし堂

大改良時計形文具兼錢入發賣



最新式時計形文具兼錢入發賣
本品は圖の如く龍頭無雙ニツケル側十九形兩蓋開きに
て一文具兼錢入を備へ一面は
筆錢入銀貨金貨紙幣印紙等を
美に仕込み裁断の優
形時計と景印千個限りの
異り上等美術浮彫り兩蓋開き九拾五
錢上製八拾錢小包送付料百五拾五
て添送の事切手代用必ず二割増し
▲代金引換小包郵便は面倒手数に付御断り申候事
専賣元 軒町十九番地 日新館商店

體色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明
劑にして如何に色黒き男女にても純白色に變
特別製劑を用ゆれば忽ち肉體純白色に變
化粧を用ひて容顔となる人は速に本劑を試み見よ眼
に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の確證新劑價は八
拾錢特別製分壹圓四拾錢
専賣元 軒町十九番地 日新館藥房

血塊月や之

忽ち下る
確證新藥

本劑(調經丸)は胃腸を痛めず子宮を害せず如何に長
き月經閉止も必ず忽ち快通流下する特効あり本劑三劑
分を用れば二三ヶ月間滞りたる月經にてもケレ一に流
下す又特別製分を用れば半年以上の月經閉止にても必
ず立處ろに流下し且つ惡血毒血を一掃すること確證す
但し本劑は其奏効極め妊婦の服用を嚴禁す
て峻烈顯著なるに付妊婦の服用を嚴禁す
座に流産するも毫も衛生無害なり婦人諸君安
分して試薬あれは壹圓分六拾錢貳圓分壹圓拾錢參圓
分壹圓六拾錢特別製分貳圓貳拾錢注意本劑の大盛
を羨み近時續々怪しき無効の類似偽藥顯はる用藥者は
深く注意ありて一專賣元日新館藥房の名義に若目し
購求あらんことを乞ふ

わきが

根治確證
新發見藥

醫藥賣藥百方手を盡せし如何に程頑固劇烈の慢性わきが
も誓て根治し決して再發或は他病に變ずる
り速に試み苦惱を脱せよ價は輕症根治分六拾錢重症根
治分壹圓貳拾錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓拾錢着金即
刻送薬す郵券代用必ず二割増の事
以上專賣元 軒町十九番地 日新館藥房
電話本局二五九六番

明治三十五年十月十日發行
 明治三十五年十月十五日(第三種郵便物認可)

リウマチスを根治し 身體を強壯活發す

變質丸を服用すれば左圖の如く筋骨を完全に且つ強壯にす



リウマチス 丸質變質

責任製藥所
 東京日本橋區路
 東國神戶小田町
 兩京神戶
 東通神戶
 大田町
 大木合名會社

明證効有先生崎山等四勳位五從正醫陸軍

治主劑本

- りうまゐす ● 神經痛
- ふしぶし痛 ● つう風
- 男女こし痛 ● 筋骨痛
- 全身たるく ● 肋骸痛
- 手足しびれ ● 肩の凝

以上記載の諸症は如何程重きも迅速に根治し再發なからしむ是れ本劑變質丸の特長也
 手足の自由を欠き數年間の苦痛の患者と雖も本劑を用ゆれば第一血の循環を能し熱を解き疼痛を全治し麻痺を取り筋骨を完全に運動を快活にし以て身軀の健全を保有せしむ

藥價 (五日分三十錢 ● 九日分五十錢 ● 十九日分壹圓 ● 四十日分貳圓 ●) (試用三日分二十錢 ● 郵券壹割増 ▲ 本劑は全國各藥店に取次す ●)

社誌雜瑣瑠淨京東 地番八十 木鈴縣河縣區田津京東 所行發 (番八六九一 局本話電)